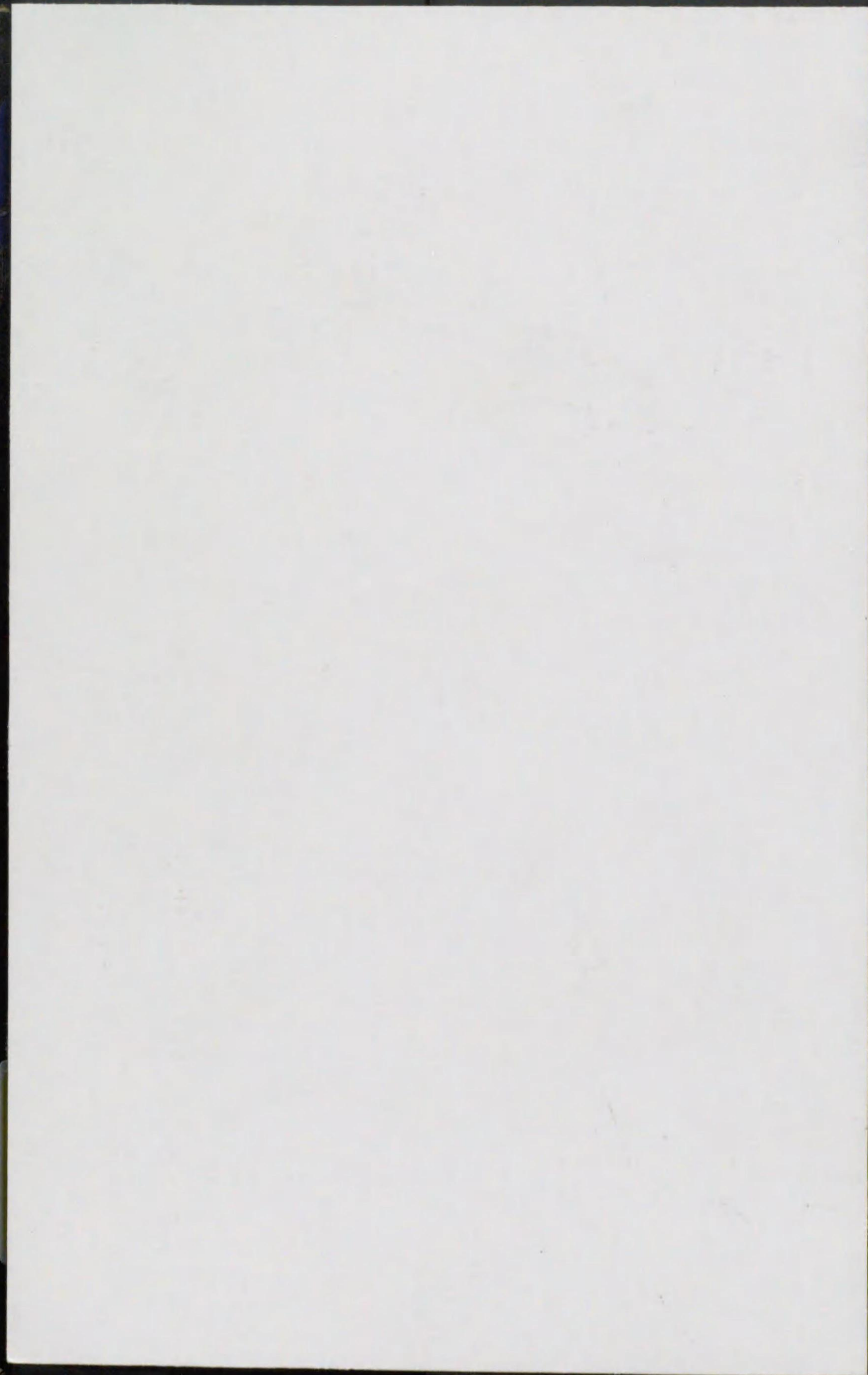
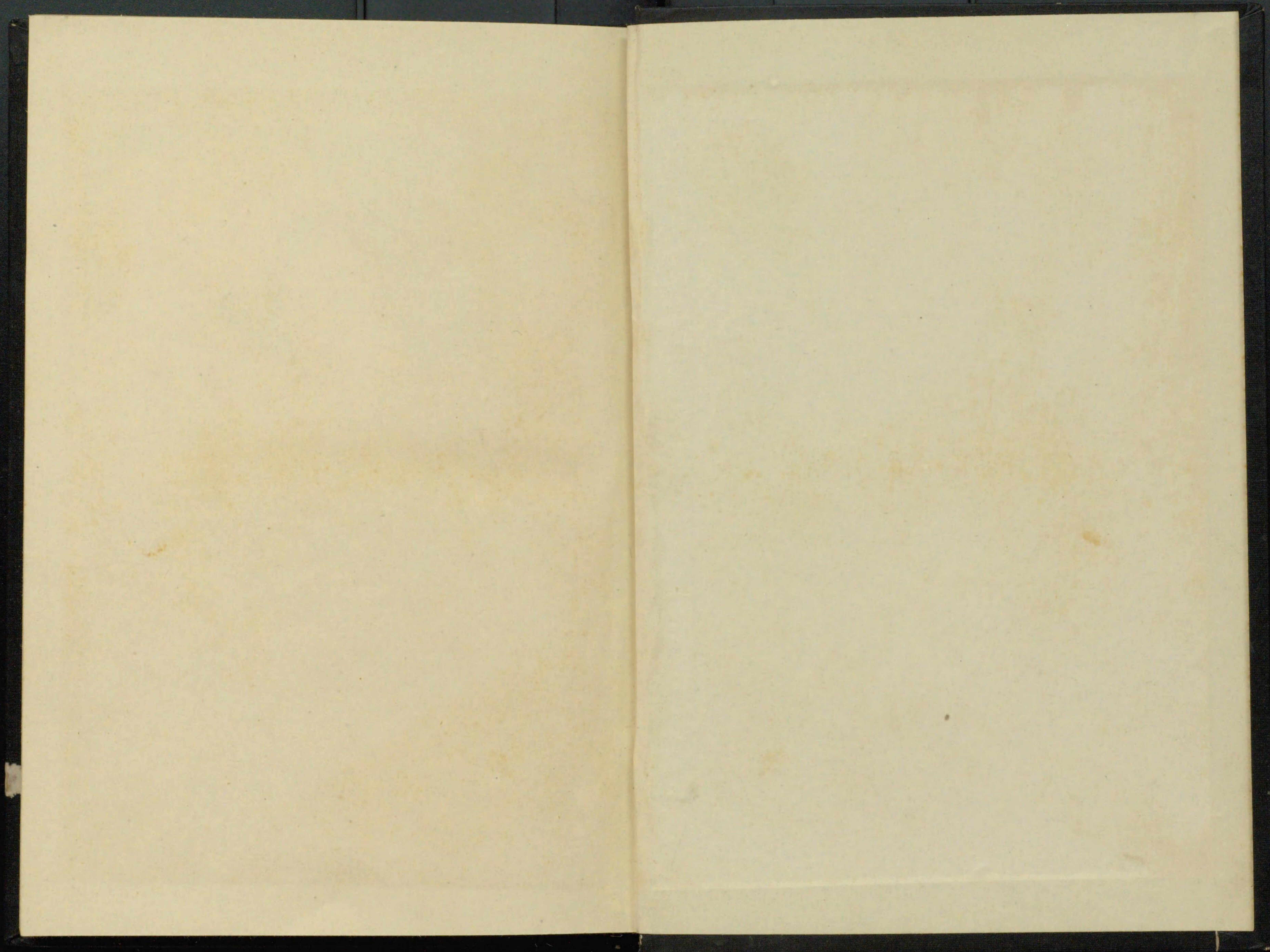


568-251



1200500543668







龍 膽

加藤武雄 著



膽 龍

著 雄 武 藤 加

568

251

巻首に

夢見る力のないものは生きる力がないとある人は云つてゐる。美しき夢のみ克く醜き現實を救ひ得る。いつまでも、その美しき夢を捨つるなかれ。現實を越えて夢見よ。その夢の中にこそ、未來の輝きは包まれてゐる。夢見る力、すなはち、よりよき現實を生むの力であるといへぬ事は無からう。

少女に與ふる言葉といふやうなものを求められた時、私は以上の如く答へた。本書收むるところの十二の短篇も、凡そ、そんな心持で書いたのである。勿論そこには人生の暗い姿も描いてゐる。しかし、讀む者の心に悪い影響を與へるやうな者は絶対に無いと信じてゐる。少しでも、讀む者の心の生活を高め深める料となるやうにと思つて、私は



I 種

W



1200500543668

龍

膽

目 次

親 友	一五
慈悲心鳥	一九
母の心配	二〇
電 報	二四
露西亞むすめ	二四
沈 黙	二九

野、林、林蔭の家、ところ／＼に水脈をひらめかしながら流れてゆく野川——いつ見ても平凡な景色だつた。冬の休み、春の休み夏の休みと、判に押ししたやうに一年三回づつ、それが五年だから十五回、往復丁度三十回のうち、今度のは二十八回目、此の冬の休みが終つて、もう一度上京すれば、あとは愈々卒業して歸るばかり、つまり、もう二回乗れば、此の汽車にも此の風景にも、おそろく當分はお別れになるのだらうと思ふと、和子は何か知ら感慨が催されて、相變らずの平凡な景色も、しみ／＼とした氣持で眺められた。

而して、十三の春に、はじめて父に伴れられて上京した時から今年十八までの五年間の、一年三回づつ、の往復に、此の汽車に乗せて運び行き運び歸つた數々の、又さまざま

の思ひが、それからそれへと辿り返されるのであつた。——あの時分は無邪氣だつた。あの、三年生になつた頃までは、歸省の時はいれしさに飛び立つばかり、上京には悲しくてそつと涙を拭いたりして——たゞ、單純なうれしさとかなしさとの外に、別に深く物を思ふ事も無かつた。

あの時分には、村の停車場まで、あの健三が屹度迎へに来てゐて呉れた。改札口の柵のところ立つて汽車から降りてゆく自分を、彼の持前の憂鬱な笑顔で、やさしく抱き取るやうに迎へて呉れる健三は、

『あぶないぢや無いか？ 飛び降りたりして、和子さんはお轉婆だなあ！』
と、小さい聲でたしなめたりした。

『だつて私、汽車が着くのがもどかしくて堪らないんですもの——まるで牛見たいにのろくさい汽車！』

鐵道便で一日早く出して、もうそこについてゐる荷物——といつても小型の支那鞆一つぐらゐだつたが、健三はそれを受取つて軽々と擔ぐと、物も云はずにづんぐと先に歩き出す。健三は、無口な少年であつた。その素氣ない様子で、いつもの事だが、和子には少し腹立たしい。が、むかうで何か云ひ出すまでは、此方で口を利いてやらない氣になつて、和子も健三のあとに附いて歩き出す。

『歩くの？ 俥に乗つておいでよ。』

健三は驛前に客待をしてゐる人力車を顎で指して云ふ。

『歩いた方がいゝのよ。』

『今日は俥に乗せて歸せつて、あなたのお父様に云ひつけられて來たんだよ。あなたが歩いて歸ると、おれがお父様に叱られるよ。』

健三が立ちとまつて云ふ。

『歩いた方がいゝんですつたら！』

『くたびれるよ。』

『大丈夫よ。私、それでも學校ではテニスの選手よ。一日走り廻つても些ともくたびれなんかしないのよ。』

和子は、いくらか誇り顔に云ふ。

『困るなあ！ あなたのお父つあんにおれが叱られるんだが——』

『まあ、あなたのお父つあん——どうして、前のやうにおぢさんと云はないの？ それに「おれ。だなんて——。どうして「僕」つて云はないの？』

『おれはおれで澤山さ。百姓には「僕」なんて言葉は贅澤だよ。おぢさんでも無い人をおぢさんといふのは尙へんだ。あなたのお父つあんで悪けりや、「旦那様」と云はうかな？』
白々とした笑ひを浮べ乍ら健三はそんな事を云つた。

いやな健三さん——と、和子は思つた。而してそんなひねくれた事を云ふ健三が憎らしかつた。だが、健三にそんなひねくれた事を云はせる健三の境遇の變化や、又、健三自身の心持の變化にはその時分にはまだ和子は十分氣がついてゐなかつた。

健三は和子より二つ上で、和子とは再従兄妹ぐらゐに當つてゐたが、両親共無い孤兒で、小さい時から和子の家に養はれて和子とは兄妹同様に育てられてゐた。大へん頭がよくて小學校でも首席を通し、小學校を卒業すると、近い町の實科中學に入つたのだが、どういふわけか、和子が女學校に入る前に一年ばかりでそこを止めてしまつた。和子の父が止めさせたのでは無い、むしろ、和子の父の意志にさからつて健三が自發的に止めてしまつたのだといふ事だが、事實どうであつたか、和子は知らない。

唯、和子の父は、

『あいつ、どうもひねくれ者でいけない。』

と苦い顔をしてゐたし、健三は、

『學校なんかやつたつてつまらない。』

とつぶやいてゐた。

だが、學校は止めたが、健三は相變らず、家の息子と、さうたいして違はずに育てられてゐた。世間の人は、和子の外には子供といふものが無い西澤家の跡目は、健三が和子の婿になつて繼ぐのだと取沙汰してゐた。その評判は、いくらか和子の頬を赤らませはしたものの、和子の耳には、別に不自然な感じを與へはしなかつた。が、健三の西澤家に對する關係は、たとへば季節のうつりかはりのやうに、それと氣づかれぬ間に徐の變化を加へて行つた。

健三が彼女の歸省を停車場に迎へて呉れなくなつた事が、その變化を一つの事實で證據立てた。あれは、和子が三年生になつた時、すなはち十六の春の休みの歸省の時だつ

た。歸る少し前に、彼女が寄宿してゐる伯母の家には時折出入するある大學生からへんな手紙を貰ひ、それを訴へた伯母からあべこべに叱られたりして、はじめて眼覺めたと云つていゝその憂く恥かしい思ひを包んで歸つたのであつたが、その時健三は停車場に待つてゐては呉れなかつた。健三の代りに、爺やがしよほく、目を睜つて立つてゐて、『お嬢様、すつかり立派な娘になりなすつた！』

と、頓狂な聲で叫んだ。

和子は不服だつた。が、どうしたものか、

『爺や、健兄さんは？』

と訊く事が出来無かつた。訊かうとすると、我にも無く顔が赤くなり、何でも無い――何でも無い筈のその言葉が、どうしても唇を離れなかつた。

家に歸つても、健三は姿を見せなかつた。歸つた事をも知らぬ氣に、下男部屋に引込

んで、反古障子を張つた暗い窓で、何か本を讀んでゐた。――そこへそつと忍び寄つて、

『健兄さん！ 昨日はどうして迎へに来て呉れなかつたの？』

と、訊くと、

『健兄さんなどと云つちやいけないよ。』

と、一言云つたきり、白い眼の冷たい一瞥を投げたきりで、素氣無く彼方を向いてしまつた。――口惜しいのか、悲しいのか、自分でもわけのわからない涙が、ほろくくと和子の頬を傳つた。

その時、和子は、健三がまるで下男同様の位置に落されてゐる事を發見した。

『おとうさん。健兄さんはどうしたの？』

和子は、なじるやうにして父に云つた。

『ひねくれ者！ あいつはな、和子。この家には居度くないんだとよ。』

『まあ、どうして?』

『どうしてだか私も知らないが、彼奴はな、社會主義とかになつたのださうだ。つまりん事を口走る事があるさうだ。何でもそんな本ばかり讀んでゐるらしい。』

父は吐き出すやうに云つて、あんな奴に構つちやいけないといふ眼附をした。

どうして、そんな風になつたのか? どうして此の家を出ようなどと思ふのか? 父

に云はせると、あゝして下男同様にしてゐるのも、自分からひねくれて然うしてゐるの

だといふが、——父の云ふ事ばかりは信じられないが、兎に角あの人はひねくれてゐる。どうしてそんなにひねくれるのか? 和子はそれが訊き度かつた。が、健三は、つ

とめて和子に會ふのを避けるやうにして、二人になる機會を與へてくれなかつた。そのくせ、遠くの方からそつと自分の様子を眺めるやうにしてゐる、その冷たい、どうかすると嘲りをさへ帯びてゐるやうな眼!

でも、去年の春歸省した時までは、健三は未だ家にゐた。去年の夏の休みの時には、和子はもう家の人としての健三を見出す事が出来なかつた。健三は、隣村の或る若い小作百姓の家に身を寄せて、自分も一個の小作百姓となつてゐた。そして、傍ら農民組合の爲めに働いてゐるといふ事であつた。——和子は、それから健三と會はないのである。

健三が、そのやうに遠い人になつてから、懐かしさは却て聶々と身を攻める。和子の十八の春も闊けて、甘く醸された酒のやうに、豊かな情感がその胸に漲るにつれて、いく人かの異性の姿がそこに映し出された。が、最初に深く刻みつけられた健三の姿にくらべれば、それ等は皆薄日の空に去來する雲の影のやうなものでしか無かつた。今更に彼女は、健三が自分にとつてどんな存在であつたか? を自覺した。それは戀であつただ。唯、何となく、兄のやうに馴れ親んだばかりと思ひきや、そこには、どんな戀よりも強い戀が、もう抜き難い根を張つてゐたのであつた。

健三さん！——彼女は燃える思ひでつれない人の名を呼ぶ。つれない人——だが單純に彼を恨むには彼女はもう餘り世の姿を知つて來てゐた。自分の家に於ける健三の位置は健三自身が自ら退かねば、彼女の父が退かねばならなかつた——そんな位置であつた事が、今の彼女には理解された。而して、健三を動かした思想の何ものであるかを、臚ろけながら彼女は學び得てゐる。健三の踏んで行つた道が、どうして正しい道でないといひ得ようか？

汽車の窓に凭りながら、和子は、こんな事を思ひ續ける。——過去の回想が、いつの間にか現在の物思ひにと落ちて行つたのである。而して和子は、今日歸省の途に上る前に受取つた父の手紙の事を考へた。その手紙には暗示的であるが、彼女にとつての重大な問題が語られてゐた。お前の卒業ももう近附いた。私は、お前が東京を引き上げるのを待ち兼ねてゐる。それで、お前と篤と相談したい事がある。お前は、あのN町のS.

Tといふ青年を知つてゐるだらうか？

その青年が、彼女の村から二三里先の小さな町の、町一番の豪家とかいふ家の次男で、今年の春駒場の大學を出て家に歸つてゐるといふ事は和子も知つてゐた。上京の汽車と一緒に乗り合せて馴々しく物を云ひかけられたりした事もあり、東京でも二三度ふとしたところで邂逅したが、一度は、

「一緒にお茶でもありませんか？」

などと誘はれて、腹立たしく拒絶した事があつた。あゝいふのが眉目清秀といふのか、色の白いオールバックの、しかし、金齒をきらめかしたりした口もとに何とも云へぬいやなところのある青年であつた。その青年との間に、自分の結婚問題が持ちあがり、父がひどく乗氣になつてゐるらしい事には、此の前の歸省の時に和子は既にうすうす氣がついたのである。愈々、それを、父から切り出したのだ。歸つたら、屹度可厭な

問題に直面しなければならぬのであらう？

あの時分、歸り急ぐ心に牛のやうにのろいと思はれた汽車があまりに早く走り過ぎるのを和子は感じた。和子は、家に歸り度くなかつた。和子は窓外の風景にほんやりとした眼を放つてゐた。

二

朝七時に東京を發てば、此の、日の短い頃でも、未だ日暮前にその野中の停車場で降りる事が出来た。

和子は改札口を出ると、自分で荷物を受取つて驛前の俵を呼んだ。その車夫とももう長い顔馴染だつた。

「西澤のお嬢様、おかへりでございますか？」

五十ばかりの車夫は、赤黒く筋張つた一つの握り拳のやうな顔に、媚び笑ひを浮べて、小腰をかゞめながら近よつて來た。

十八にしては大柄な、すんなりとした姿は、瑠璃色のシャルムウズの羽織の色をあたりに浮き立たせてた。引きよせらる俵を待つて、それに乗るまでのしばらくの間にも、あたりの人目が一齊に彼女に集まつた。

「西澤のお嬢様！」

「あゝ、西澤のお嬢様！」

おしひそめかれた囁きが、口々にさゝやきかはされるのを彼女は聞いた。彼女の、寶石のやうに美しい眼は、やり場も無く足もとに落され、彼女の頬にはやゝ血が上つた。

——村の小さな女王の如く、讃嘆と尊敬とをあつめてゐる和子であつた。

だが、そこから二十町ばかりの夕日の赤くさしわたる道を、車に揺られながら、彼女

の心は暗かつた。——彼女は、此の道を、迎へに来て呉れた健三と一緒に、二匹の仔犬のやうに、走りもつれながら歸つた幼い頃の自分の姿を思ひ浮べた。脛の半ばにしかとどかぬ短い袴を穿いて、空色の靴下に小さい編上の靴、靴の踵が高く跳ねた——。

その時分は垂髪にしてゐた。健三は歩きながら、よく背後から垂髪の端を引張つたりした。

『いやん！ 健兄さん。』

『だつて、それを見ると、引張つて見度くてたまらなくなるんだもん！』

と健三は笑つた。

そんな事が、今、和子に思ひ出された。

今思ひ出しても微笑ましくなるやうなあの頃の無邪氣な少女、而して無邪氣な——いや、健三は、あの頃から、一風變つた考へ深い少年ではあつたが、しかし、まだ多くの

少年らしい無邪氣さを有つてゐた。それが段々憂鬱に、無口に、而して自分に對しては、徐々に面をそむけて、横顔を、やがて後姿を——その後姿さへ、もういかに遠いものになつてしまつた事か。

最後に會つたのは、去年の春だから、もう凡そ一年になる。あの時も、健三は相變らず素氣無かつた。

『もう一年ですね。卒業したら、矢張家歸らなければならぬでせう。』

そんな事を唯一言言つて、それきり口を噤んでしまつたのであつた。栗色の淺黒い頬は、いたましくこけて、みだれ落ちた頭髪の蔭に沈鬱な額を見せ、眼は底深くきらめいてゐた。一人の若い農夫——といふよりも、寧ろ一人の若い革命家と云つたやうな相貌には、男性的な強さが見てとられたが、同時に深い内心に苦惱も亦、つとめて微笑まうとする唇邊の動きを裏切つてゐた。——健三さん！ 和子は、その面影を描きながら覚え

ず心の中に叫んだ。

俾は、桑畑の中の平らな道走りつづけた。道の兩側の桑畑には、黒く霜にやけた桑の葉が、條にしがみつきのながら、がさくと鳴り、桑畑の彼方には、國境の連山が、夕日に雲の嶺をきらめかしてゐた。

道祖神の石碑の立つてゐるところから、道が二つに分れてゐた。右へ行けば、健三が今住んでゐるF村である。

と、その道の連想からか、それとも、今、俾の上で思つてゐた和子の氣持が通じたのか、車夫がふとこんな事を云ひ出した。

「お邸に居た健三さんもなあ。どえらい事をやり出しましたでなあ。」

健三と聞くと、和子の心は躍つた。

「健三さんがどうかしましたの。」

「お嬢様は御存知ぢや無いんですかえ？」

「え、私知らないわ。」

和子は不安に息詰まるやうにして云つた。

「組合とかいふものを拵へて、近所の小作人をそゝのかしてゐるぢふ事でしたかな。」

此の秋の小作米の事で、小作人者の先棒に立つて、F村の地主のM様な、あの人を相手にでかい騒ぎをやりましたつげが——それがまだ、ひきつゞきになつてゐましてなあ。」

車夫はこゝで息をついで、

「とうとう裁判になつて、Y市の裁判所に呼び出されたりしましたつげが、矢張小作人側の負けになりましたな。何でも、そんな事からF村にも居た、まれなくなつて、東京とかへ出かけて行くぢふ事ですが——。」

「まあ、健三さんは、ぢやもうF村にはゐないんですか？」

和子は思はず聲を弾ました。

「未だ出かけやしますめえ。何でも近々に出かけるとかいふ噂でございましたが——。」
と、車夫は再び息を喘がして

「あの人も、大へんな利口者だといふ事を聞きましたが、どういふもんでございますか
なあ。おとなしくお邸に御厄介になつてゐたら宜かつたでございませうになあ！」

和子は答へなかつた。健三が東京へ行く？ では、あの人とはもう本當にこれつきり
になつてしまはねばならないのであらうか？ 頼むともなく頼んで来た一縷の希望も、で
は全く絶えてしまつたのであらうか？ 和子は俵の上で身を悶える思ひであつた。

その夜、和子が家に歸るのを待兼ねたやうにして、和子の父は和子の縁談を切り出し
た。高壓的な——といふよりも、自分の意志以外別に和子自身の意志の存在をば、はじ

めから、認めてゐないやうな父の態度だつた。それもこちらから、嫁入と云ふのでは無
い此の縁談の性質上、此方からまづ申し出で、先方の内諾を得てゐるといふことであ
つた。

「だつてお父さん！」

一通り話を聞いてしまふと、和子は涙ぐんで、激しい調子で云つた。

「私、そんな事可厭ですわ。」

「可厭だ？ ぢや、お前は不服だといふのかな。」

父は驚いて云ふのであつた。

「だつて——私にも、もつとよく考へて見させて下さらなきや——。」

「考へて見る餘地は無ささうに思ふがな。」

「でも、考へて見なきや——。」

「それは、考へて見るが可いさ。未だすつかりとりきめたといふわけでは無いのだからな。」

だが、父は、和子がそんな風に溢るのも、其場のきまり悪さなども手傳つての、つまり、娘らしい姿勢だと軽く思ひとつてゐるらしかつた。片親の、他一倍慈愛深い父が、自分の將來の幸福の爲めにどんなに心を碎いてゐるかを知つてゐるだけに、和子は然うした父の無理解が悲しかつた。

三

思ひ迫つた心持で、和子が、父の手前をば近くの町の、小學校時代の友達を訪ねるのだと云ひこしらへ、世をも人をも忍ぶ思ひで、F村へ出かけて行つたのは、家に歸つてから四日前の今年もあと二三日に迫つたある日の事だつた。

出来るだけ目立たない服装に、黒いシヨールで、顔の半ばを包み、人通りの少ない野中の間道を選び、F村に辿り着いた時は、もう午後三時頃だつた。狐色の芝堤は淡い日に燻り、辻の火の見柱が高くもり空に立つて、寒い風がびゅうくと電線に鳴つてゐる。その火の見柱の下、村の青年會の掲示板などが出てゐる前で、貧しげな子供が五六人、わいくと聲を立て、戯れてゐた。和子はその子供の一人を捕へて、

「I・Kさんつて人のおうちは何處？」

と聞いて見た。I・Kといふのが、健三が身を寄せてゐる若い農夫の名であつた。

子供等は、見馴れぬ美しい人の姿をいろいろと眺めて、頼にはその問ひに答へなかつたが、赤ん坊を背負つた年嵩の一人が、

「I・Kさんなら、おらがの隣だあ！　すぐそこだあ！」

と云つて、頼むとも云はないうちに、もう案内の爲めに先に駆け出した。此の美しい

人を自分の隣の家に迎へる事が子供心に誇らしいのであらう。

子供を先に立て、畑の中の小徑を横切つたり、櫛の生櫓に沿つたり、すぐそこだとは云つたがそれでも五六町はあつたらう。藪の蔭の小さい藁葺屋根の横手に出て、

『I・Kさんはこゝだよ。』

と告げられた時、和子の心臓は激しく躍つた。が、ここまで来て、こゝで、氣が弱つては駄目だと自ら激まして、和子はその家の縁先に立つた。

『御免下さい。』

といふ聲に應じてその縁の障子をあけて出て来たのは、思ひ掛けない、色白の、鳩のやうなやさしい眼をした、彼女自身と同じ年頃の娘だつた。先方もびつくりしたらしかつたが、和子も狼狽した。びつくりしながら、狼狽しながら、しかし瞬間に相手の全部を見てとらうとするやうな侵略的な視線で、四つの眼は切り合つた。

『あの、こちらがI・Kさんで御座いませうか？』

和子は、しかし、すぐに落着をとり戻して云つた。

『はあ。I・Kでございますが——。』

『あの西澤と申すもので御座いますが、木村さんはいらつしやいませうか？』

と、和子は健三の姓を云つて聞いた。すると、娘が未だ返事をしないうちに、横手の低いくゞりを開けて土間から出て来た若い男があつた。

『私がI・Kです。』

日に焼けた顔に白い齒の眼立つその逞しい青年は、快活に云つた。そして、和子が會釋するのも待たずに續けた。

『健三君は此の二十三日に東京へ行きましたよ。あなたにお届けして呉れるやうにつて手紙を置いて行きました。喜久！ 神棚の隅にのせてあるあの手紙をもつて來な。』

娘は、中へはいつて行つた。

「まあ、ぢや、もう此方にはいらつしやらないのでございますか？」

「えゝ。村に置かれなくなりましてな。私等も追附け、あとから出かけて行くつもりです。」

熊手のやうな大きな手になた豆の烟管を掴んで野良着姿の I・K は、白い歯を出して元氣よく笑つて見せた。

娘が、一通の手紙を持つて出て来た。渡す手も、受取る手も、ややふるへを帯びて居た。

「折角でしたね。お茶ぐらゐはありますよ。まあ、休んでおいでなさい。」

と、I・K はそれでもそんなお愛想を云つたが、和子は手紙を受取ると逃げるやうにそこを出た。足もとから逃げてゆく二三羽の矮鶏が毬のころがるやうに見えた。

二十三日と云へば、丁度自分が東京から歸つた日だつた。自分といれちがひに出て行つたのも、故意にさうした事のやうな氣がしてならない。それに、あの娘！ あの娘の敵意を含んだやうな眼がしつこく和子の眼の前にちらついた。

でも、手紙を残して行つて呉れたのはせめてでもある。和子は早く手紙を読み度かつた。が、どんな事が書かれてあるかと思ふと、封を切るのが怖ろしい氣もした。

F 村を出はづれて、山裾の林の蔭の道にかゝつた時、和子は思ひ切つて封を切つた。風がおさまつて靜かに動くほゞけ芒が夕日の影をみだしてゐる。その日だまりの落葉の上に腰をおろして、和子はその手紙を読んだ。ノオトの頁を切り取つたらしいザラ紙の西洋紙に鉛筆で書かれてゐるが、しかしそれは決して無雜作な氣持で書かれたものでない事は、力の籠つた調子にも知られた。

(一度會ひ度いと思ひました。會つてから東京へ行かうと思ひましたが、矢張會ふ事は

思ひ切りました。僕はあなたが、怖いのです。(ぶツつけに先づ斯う書いてあつた。

(僕は此の社會を良くする爲めの正しい仕事に戦はうと思ふ。その戦ひに一生を捧げようと思ふ。此の僕の氣持をあなたはわかつて呉れるでせうか？ 僕をこんな氣持にならせたのも、實はあなたなのです。今こそ白状します。僕がどんなにあなた故に苦んだか？ 僕の氣持が今のやうな傾向をとつたのも、その苦みから、免れ度い爲めの努力の結果なのです。あなたの家を出たのも、村のわからずやは僕を謀叛人だと云ひますがこんな謀叛人になつたのも、和子さん、みんなあなたの爲なのです。あなたの家にてあなたのお友達でゐるうちはいゝけれど、聽てお友達でゐられなくなる時が来る。あなたは豪家のお嬢様で僕は貧乏人の孤兒です。二つの世界に住んでゐる二人は、やがてそれ〴〵の世界に別れなければならなくなる。僕は、その時の事を考へて、さういふ時が来ないうちに、さういふ運命に先方から迫られないうちに、自分の意志で自分の運命を

定めてしまつたのです。運命を意志につくり變へたのです。此の心持があなたに判つて頂けるでせうか？ 僕は苦んだのです。苦み抜いたのです。そして、近頃はやうやくその苦みから脱れかゝりました。しかし、あなたが村に歸るやうになると、切角、征服しかけた苦みが、また新しく頭を擡げるかも知れません。そんな事も考へて、私は東京へ行くのです。

あなたが僕に好意をもつてゐて下さる事は、僕はよく知つてゐます。それだけ、僕は一層苦しいのです。しかし、あなたと僕とは住む可き世界が違つてゐるのです。あなたの世界と僕の世界とは互ひに戦ひ合はなければならぬ世界なのです。僕はあなたの住んでゐる世界を呪ふ。しかし、あなたの幸福をば心から祈らずには居られません。では左様なら。かうして靜かな心持で、あなたにお別れの手紙を書けるやうになつた僕を、僕は自分で賞めてやり度い。僕はやうやく長い間の苦みから卒業する事が出来たのです。

左様なら。

そこで手紙は終つてゐた。半ばまで読んで来て、和子はもう涙を流してゐた。(左様なら。)と、最後の一句を読み了ると同時に、和子はその手紙を顔に押しあてた。

「あなたはそれでいゝかも知れない。だけど、私は——私は——」と、和子は、泣きじやくりながら心の中で叫んだ。

「私はどうすればいゝの、私はどうすればいゝの！ 健三さん。和子はしばらくの間然うして泣いてゐた。が、やがて彼女は氣を取り直した。而して、「いゝえ！」と、云つた。

「あなたは苦みから卒業したと仰有るけれど私の苦みはこれからはじまるのだわ。而しあなたもはう一度、私と一緒に苦んで下さらなければならぬのだわ。」

(左様なら！)しかし、自分はそんな言葉は受取れないと和子は思つた。兎に角、自分の東京生活は未だ三月を餘してゐる。三月の間には屹度あの人に會へる。あの人との關

係がこれでおしまひになつたとは思へない——。

彼女は斯う心に繰返しながら、泣いたまゝの眼を足もとに落した。そこには、濃い紫の龍膽が點々として咲いてゐた。(昭和元年十二月)

氷

母は、やうやく眠り入つた。母が眠り入つたのを見ますと、波子はそつと枕もとを立つて次の間にはひつた。

そして、入口の襖のかけに立つたなり、帯の間からSの手紙を取り出した。先刻速達で配達されたので、速達だから勿論急ぎの用であらうし、一刻も早く讀まなければならぬと思ひ乍らも、今までその隙が無かつたのである。

手早く封を切つた。亂暴な文字の書き振りに、荒み苛立つた情思の姿を見せて、あなたに會はない日が數へて見るともう十日になる。僕の心は饑る渴き、遺瀨無き苦悶の爲め物狂はしくさへなつてゐる。もう三日もこんな日が續いたら僕は本當に氣が狂ふかも知れない。たつた一目でいゝのだ。是非會つて下さい。阿母様が大へんお悪く、その看

護に手の離せぬといふ事情を知りながら、こんな事を言ふのは本當に無理だ。あなたを困らせるばかりだ。それはよく知つてゐるのだけれど——。一目でいゝのだ。五分か十分でいゝのだから、是非會つて下さい。會へる機會をつくつて下さい。あなたが来といふ場所へ、僕は何時でも飛んで行く。凡てこんな風の意味の事がその手紙には書かれてゐた。

それを讀むと、波子は嘆息した。——母は今、死のもう一つ手前にゐる。次の利那をはかられない危篤の状態にゐる。會ひ度い事は自分だつて同じだけれど、場合が場合なのだ。何故、事情をきゝわけて、靜かに堪へてゐては呉れないのか？ 十日や二十日會はないたつて、いや、三月五月、たとひ五年七年會はずとも、それ故に變るやうなそんな浮薄な二人の愛では無い筈なのに——と、波子はあまりに、一圖な性急な、動もすれば狂熱的に燃えてゆく男の心が嘆かれるのであつた。

「姉さんー」

と、不意に呼びかけられて、驚いて振り返つて見ると、妹の夏子がそこに立つてゐた。

夏子は、黒い靴下の脛の半まで、短く海老茶の袴を穿いた女學校の二年生だつた。

「あら、お歸り？」

波子は、さりげなく言つたが、掌に手紙を押揉みながら、その手は袂の蔭で激しくふるへてゐた。

「何を讀んでいらしたの？」

夏子の眼の底には冷かな笑ひがさゝなみ立つてゐた。十五といふ年齢にしては大人に過ぎてゐる夏子の、そつと自分の秘密をのぞき込まうとする好奇的な眼が、波子にはうるさい氣がした。

「何でも無いのよ。」

「然う？ —— 今日はおかあ様は何う？」

「今日は少しはお樂らしいのよ。」

「然う？ 私、今日相川さん許へ行つていゝか知ら？」

と、夏子は流石に遠慮ッほく言つた。

「相川さん許？」

「えゝ。遊びにぢや無いのよ。數學でどうしても判らないところがあるの。相川さんと二人で相川さんのお兄様に教へて頂くのよ。——もう、直に試験が初まるのよ。」

夏子は、忙しい言葉附で辯解するやうに言つた。

「相川さんのお宅には電話があつたわねえ。」

「えゝ、あるわ。」

波子は一寸の間考へてから言つた。

「ぢや、行つていらつしやい。急に御用が出来たら電話をかけるから。」
夏子は、袴を脱いだけで、着物も着かへずに出て行つた。

二

枕もとに戻つて見ると、母は氷嚢を額にあて、相變らず眠つてゐた。呼吸も割合に静かだつた。

波子はぢつと母の寝顔を眺めた。色白の母の顔は、血の色を失つて、まるで蠟細工のやうに透き通つてゐた。落ち窪んだ眼のまはりや、小鼻のあたりには、正しく死の豫表なる鉛色のかげがまつはつてゐたが、そして眉が時々苦痛の爲めにひそめられたが、その顔は、稍々骨立つたとは云へ些とも端正な輪廓を崩しては居なかつた。高い鼻、小さい唇、デリケートな線を有つた顎——それは聖畫の中のそのやうな聖らかな顔だつた。

醫師に、昨日、長くて十日とさゝやいた。斯うして母と居る時も、もういくらも無いのだと思ふと、波子は今更のやうに悲しかつた。此の母が、どんなに深い愛を以て自分を愛して呉れた事か？ 世の中の、何の母にも増して良い母、此の人を母にもつた幸の幸福を常に感謝せずにはゐられなかつた母。しかも、此の母は、何の酬いも受けようとせず、斯うして自分の傍から去らうとしつゝある。

波子は、あの人がある故に、動もすれば看護の心も亂されがちな自分を省みた。秘かなる戀故に心を分たれて、知死期の母にすべてを捧げ得ぬ自分は、何といふ不孝な娘であらう？ さう思ふと波子はたまらなかつた。

と、母はすこし身動きした。そして、靜かに眼をみひらいて、額越しにまくらもとを掻き探るやうにした。

『おかささま。』

水

波子は、母の顔に自分の顔を寄せるやうにして、

『どうですか？ 御氣分は？』

『あゝ。お前、そこにゐて呉れたのだね？』

『ひどくお苦しい事はありませんの？』

『あゝ、今日は大へんらくですよ。何だか、夢を見てゐたやうだが——』

『さう？ どんな夢をござらんになつて？』

が、どんな夢を見たかを母は語らなかつた。まとまつた話をするのはたい氣なのであらう。波子もきかうとはしなかつた。

『波ちゃんも大へんだね。本當に波ちゃんにばかり苦勞をかけるね。』

母は半獨語めく調子で言つた。

『いゝえ、おかあさん。』

『だけど、私も今度は駄目ださうだ。波ちゃん、お父さんと夏子を頼みますよ。』

母は、はつきりとした調子でそんな事を言ひ出した。

『まあ、おかあさま。』

母の口を漏れる、あまりに悲しい言葉を堰止めようとしてもするやうに、波子は斯う言つたが、あとの言葉が續かなかつた。

『お父さんはあんな人だし——それに、夏子は、お前とは少し性質が違つてゐるやうで、私はあの子の事が心配になるのだよ——尤も、あんな性質の方が、却て世の中から、に渡れるかも知れないとは思ふがね——』

母は、苦しい息を喘がせながら、とぎれくゝに續けた。

『深く考へる性質の者は、それだけ苦勞も多いわけだからね。——波ちゃんは、もつと呑氣になつた方がいゝやうだね。』

「……………」

波子は言葉も無くうなだれてゐた。

「波ちゃん！」

と、母はしばらく間を置いてから呼びかけて、

「私は今、お前がそこで泣いてゐるやうな気がした。それで眼が覺めたんだがね。お前、何かひとりで考へてゐる事があるんぢや無いかえ？」

きれいに澄んだ母の眼は、鋭いといふのでは無いが、ちつと心の底を見透かしでもするやうな不思議な輝きを帯びてゐた。波子は、その眼の前に狼狽した。

「いゝえ、おかあさま。」

と口ではさりげなく言つたが、その表情の混乱をどうする事も出来無かつた。

「何か一人で心配してゐる事があつたら、私にお話し！」

「……………」

「隠さずに私にお話しよ。私は決して悪いやうにはしない。お父様にも、私から話してあけるからね。」

父はもう大體を察してゐる。いや、知つてゐる。Sからの手紙を父に發見されて、激しい詰問と叱責とを受けたのは、一週間ばかり前の事である。——波子は、問はれるまに一切を母に告げようかと思つた。母ならば、理解して呉れるに違ひ無い。好意をもつて二人の愛を護つて呉れるに違ひ無い。だが、母は死んで行かうとしてゐる人では無いか？ 死床に苦んでゐる人ではないか？ 若し、その爲めに母と父との間に争ひでも起し、その爲めに母にあらぬ心配をかける事でもあつたなら？ いや、そんな事は無いとしても、此の場合、どうして母に言へるだらうか？ ——知死期の悩みの中にある母に、自分の戀を告白する勇氣を、波子は有ち得無かつた。

『いゝえ、おかあさま。』

と、波子は小さく答へた。

『さうかえ？ 本當に何も考へてゐる事などは無いのかえ？』

母の眼には、やゝ苛立たしげな色が浮んだ。言はなければ母を欺く事になる。言はうか？ 言つてしまはうか？ 否、否と波子は思ひ返した。言へない！ そんな事は言へない！

『おかあさま。私、何も考へてゐる事などは無いの。——それよりか、おかあさま。早くよくなつて下さい。』

波子は迫つた調子で言つた。

『よくなり度いとは思ふのだけれど、今度は駄目さうだよ。』

『そんな事言はないでおかあさま。』

波子は涙ぐんでしまつた。

母の眼にも、睫毛を押しあけて涙がたまつた。が、その涙の底から、澄み透つた瞳がちつと波子の顔を眺めてゐた。死に近い人の異常に敏くされた心は、どんな秘密をも看放かすにはゐないといふやうに、その瞳に籠められてゐた。

その瞳を見むかへた時、波子は再びはつとしたのであつた。

三

夏子は夜になつても歸らなかつた。——母は、昏々として眠り續けてゐた。

『せいの無い顔をしてゐるな。疲れたのだらう？』

と、工場の監督から歸つて來た父は、いたはりを籠めて波子に言つた。——此間の事があつてから、父娘はあまり口を利き合はなかつた。父の言葉には、いくらか機嫌を取

るやうな調子もあつた。

『お前にまで病氣でもされちやそれこそ専だ。少し休むがい。おれが少し代つて坐らう。』

父は然う言つて母の枕もとに坐つた。

『ぢや、少し見てあけてゐて下さいな。私、氷をとつて來なけりやなりませんから。』

『氷——幹をやつたらいゝぢやないか？ でなけりや夏子をやりなさい。』

『夏子はお友達の許へ行つて居ますの。』

『友達のところへ？ 呑氣な奴だな。』

と父は舌打をした。

『一寸行つてまゐります。それに少し買物がありますから。』

波子は氷を入れる籠を提げて家を出た。氷もとつて來なければならなかつたが、波子

は一寸Sの下宿に電話を掛けようと思つて、それで外へ出たのだつた。角の自働電話に走つて行つて、電話を掛けて見たが、交換手が別の番號に繋いだりして、その番號が呼び出されるまでに、十分ばかりも苛々とした時が費されなければならなかつた。その上、やつと出て來た下宿の女中は、例の馬鹿にしたやうな聲で、

『Sさんはいらつしやいません。』

と、膠も無く言つて、突き放すやうに電話を切つてしまつた。

波子はがっかりして自働電話を出た。そして、夏の夜のそゞろ歩きにさゞめき立つた群集を外に眺めて、大通りを横切つた向う横町の氷問屋へ行つて、一貫目ほどの冷やし氷を求めた。もう一度、電話をかけて見ようか知ら？と思つたが、それもあきらめて、しかし何か知ら心残りのするやうな落着かない氣持で家の方へ歸らうと、うつむき勝ちに雑沓の中をすりぬけて歩いてゐると、

「波子さん！」

と、眞向から呼びかけられた。驚いて振りあげると、そこにSが立つてゐた。

「あら！」

波子の聲は筒抜けして走つた。——だが、波子は、それが自分の物思ひの裡から脱け出した一つの幻影ではないかと思つた。こんなところで、Sに會ふなんて？

「會へた。矢張會へたんだね。」

Sの聲は低かつた。併し、叫ぶやうな調子だつた。

「まあ、どうなすつたの？」

漸く我に歸つたやうにして波子は言つた。

「どうしたのつて？ ——あなたに會ひ度いと思つて、僕は此頃毎晩、此の邊にうろついてゐるんですよ。今夜は何だか會へるやうな気がした。——矢張會へたんだね。」

Sのきらりと燃える眼には物惱ましさのうちに抑へ難い歡喜の表情が躍つてゐた。十日見ぬ間に、Sは明かに憔悴してゐた。気が狂ひさうだと手紙に書いて來たのも決して誇張とは思へなかつた。ひしくと迫る激しい彼の氣息が、彼女の胸を苦しくした。

「毎晩、此邊を歩いて？ ——まあ！」

「僕は苦しい。逆も苦しくてたまらないんだ。だが、今夜は實にうまく行つた！ ——お使ひに出たんですか？」

「ええ。冷し氷を買ひに出たのよ。」

「冷し氷か？」と、Sは波子の手の籠に眼をやつて、

「僕もそいつを欲しいな。この燃えるやうな額を冷やして貰ひたいもんだ。」

Sはさう言つて顔を歪めるやうにして笑つた。波子も思はず釣りこまれて、淋しく笑つた。

「おかあさんはひどくお悪いの？」

Sは思ひ出したやうに言った。

「え、いけないのよ。——困るのよ——と、いくらかSを恨むやうに言ったが、さういふ言葉の下から波子はすぐに心弱くさしぐまれるのであつた。Sの顔を見ると、堪え性もなく泣き度くなるのが波子の癖だつた。

「あなたの事情はわかつてゐながら、種々と僕はあなたを苦めるのだね。だけど、波子さん。僕も苦しいんだよ。」と、Sは言ひわけをするやうに言つて、

「ねえ。折角會へたんだから、少し僕と一緒に歩いて呉れない？ 歩き乍ら話して呉れない？」

「え、十分か十五分ぐらゐなら構はないわ。」

波子はSについて歩き出した。

「それ、僕がもつてあげませう。」

「いゝのよ。」

「持つてあげると云つたら！」

Sは奪ふやうに氷の籠を自分の手にとつた。二人は、人通りの少ない河岸の方へと歩み入つた。——濛青の色の濠の面はところどころに岸の街燈の黄ろい影を映してゐた。それを眺めながら二人は立ちどまつた。

「どんなに苦んでゐるか？ 蟻地獄に落ちた蟻のやうな焦燥の中で、どんなに此のやる瀬ない愛をもてあましてゐるか？ Sは、吃々とどもるやうな調子でそれを繰返した。

二人の戀が決して好望な状態に置かれてはゐないとは云へ、あれほど堅く誓ひ合つてゐるのに、どうしてそんなに不安がるのであらう。Sの心持は、たしかに病的と云つてもいゝものだつた。が、その病的な氣持にまで自分自身を押しつめずにはゐられなかつた彼

の情熱と、そして、情熱的な性格を考へると、波子はSを責める事などは出来なかつた。「ねえ。私を信じて下さいな。——どんな事があらうとも、私は決してあなたから離れなどはしませんから——ねえ、信じて下さいな。」波子は、かう繰返すより外なかつた。「さう言つて貰ふと、僕の氣持は落着くのだ。——だが、三日ばかり経つとまた何となく不安になるんだ。」

Sは、自ら憫むやうに苦笑した。

「困るわねえ。本當に——。」波子は、駄々ッ兒をなだめる母のやうな心持で斯う言つた。

「もう、少しむかうへ行つて見ようか？」

Sは先に立つて歩き出した。波子は、もう十分は疾くに過ぎてゐると思ひながら、矢張、あとに跟いて歩き出すより外無かつた。母の事が氣にかゝりながら、波子も矢張別れともない氣持に引き摺られてゐた。

四

「もう歸らなければいけないわ。」

波子が、かう言ひ出したのは、それからまた十分——いや、若しかしたら二十分ぐらゐる経つてからであつた。

「もう少しいゝでせう？ まだあれから十分ぐらゐるしか経たないぢやありませんか？」

「いゝえ。もう三十分は大丈夫経つてゐますわ。」

「そんな事は無いよ。まだ五分くらゐだ！」

「あら、あんな事。」

波子は苦笑しながら言つたが、さう思へばそんな氣もした。戀の時は早く経つ！

「だけど、本當にもういけないのよ。もう、お母様が眼をおさましになつたかも知れな

いわ。」

「もう、少しいゝでせう。」Sは、強情に言った。——こんな場合、ひどく強情で、さうして意固地に我がまゝになるSの性質を波子は前から知つてゐた。

「困るわねえ。」

それからまた二三分、しかし、何を話すでもなく時が経つた。

「ね、ぢや、また、明日の晩お會ひするわ。今夜はもういけないのよ。お父様はあなたとの事を氣がついてゐるから、こんな遅くなるかと屹度へんに思ふわ。」

「いつそ、あなたのお父様に會つて、僕は直接に申込んで見ようか知ら？」

「そんな事したらそれこそ駄目よ。お父様はとも頻固なんですから——。」

「あなたはその頑固なお父様と戦ふだけの、戦つて勝つだけの勇氣があるか知ら？」

「それを思ふと僕は不安でたまらなくなる。」

「大丈夫よ。——それは、私、あなたに誓ふわ。いざとなれば私だつて勇氣を出すわ。たゞ、今のところはね、かおあさまはもう長い事は無いのですから——」と、波子は涙含んで、

「もう一週間ぐらゐるかも知れないのよ。だから、そんなおあさまに餘り心配かけたくないのよ。——だから、あなたも、もうすこし我慢して下さいな。」言葉の末が、逆る涙の中に亂れた。

「さうだね。僕はあまり我がまゝ過ぎたね。波子さん、僕は結局あなたを苦めるしか知らないんだね。」

波子の涙は、Sをして、その盲目的な情熱をいくらか理性の方へひきもどさせた。

「無理に引きとめて本當に悪かつた。——ぢや、また明日の晩——いや、僕は靜かに苦みを堪へてゐるよう！」

と思ひきりよく言ひながら、Sは氷の籠を波子に返した。而して、

「でも、あなたに會へたので、僕の心は軽くなつた。」と言つた。

軽くなつたのは、しかし、Sの心だけでは無かつた。波子は、氷の籠がすっかり軽くなつたのに氣がついた。のぞいて見ると、籠の中の氷塊は半分以上も小さくなつてしまつてゐた。此の蒸し暑い夏の夜が、それを溶かしたのか？ それとも二人の情熱が、それを溶かしたのか？ いづれにしても、二人がさうして話し合つてゐた時のかなり長かつた事を、その氷塊が語つてゐた。

「あら、あら！ こんなに氷が溶けてしまつたわ！ おかあさまの氷が——」

波子は當惑したやうに、かう小さく叫んだ。そして、仕方なしに笑つた。笑ひながらしかし、彼女はほろ／＼と涙を落した。(波子よ！ 此の上お前が泣いたら、その熱い涙が、大切な母の氷を、更に小さく溶かしてしまふであらうに！) (昭和元年十二月)

めぐりあひ

追 憶

三千子は東京へ来てから、もう二月ばかりになった。東京の生活にも少し馴れてきた。叔母さんも叔父さんも大へん親切にしてくれるので、初めて家を離れた心細さも次第に薄らぎ、學校の方も、未だ特別に親しくするお友達はできなかつたけれど、みんな優しくしてくれるので、最初心配したやうに、田舎出のひきめなどもさう感じないで済んだ。『そんな言葉を使つたら東京へいつて笑はれますよ。』と、前から母に注意されてゐたかひがあつて、東京言葉も困りはしなかつた。つい、訛りを出して、思はず顔を赧くするやうなことも時々はあつたけれど――

叔父さんはお医者さんだつたから薬局や診察室の方は始終賑かだつた。しかし使用人の數はあつては家庭としては叔父叔母二人きりで、ことに叔母さんは酷く淋しがつてゐ

た。娘は二人共嫁にいつてしまひ、一人の息子は外國に留學中で、あと二三年しなければ歸つて來ない。で、是非、三千子をよこして貰ひたいといふ、半分は叔母さんの方からの希望で、三千子は今度東京へ出て來ることになつたのであつた。

三千子の部屋にきめられた二階の六疊は、もう七八年前に、三千子の兄が、矢張今の三千子と同じやうに、この家から學校に通つてゐた頃に使つた部屋だといふことであつた。

『あなたの兄さんの輝夫さんもね、丁度そんな風に机をおいて、この部屋で勉強したものですよ。』

と、叔母は思ひ出を呼ぶ眼つきをして、

『本當に輝夫さんは勉強家だつた――あの人は、本當に惜しいことをした。』

『まじう？ 兄さんもこのお部屋で――』

めぐりあひ

三千子も、あの死んだ兄のことをなつかしく思ひ浮べながらいつた。二年前に、肺を病んで死んだ輝夫は、三千子にはたつた一人の、そして大好きな兄だつた。が、三千子は、兄を思ふと同時にあの別れた義姉のことを思ひ出した。義姉は今東京に居る筈である。どうかして一度會ひたいと三千子は思つた。三千子が今度東京へ出てくる時、心ひそかに秘めた願ひは、何よりも先づこのことだつた。あの悲しい本意ない別れをした美しい優しい義姉にもう一度會ひ度い。東京へゆけばきつと會へる。女學校へはひるこことよりも何よりも、たゞ義姉に會ひたいといふそのことのために、三千子は東京へ出て來たのだといつてもよかつた。

だから、その時も三千子は叔母の前に義姉のことをいひ出してみようと思つた。が、何となく憚られるやうな氣がして、そのまゝ口を噤んだのであつた。

今年十四の三千子は、その時分まだ十にも足りなかつた。だから、一切のことが、霧

の中に動く象のやうに臆氣にしかわからなかつた。兄と義姉との關係が、どのやうにして結ばれたか、どうして二人が妻と呼び夫と呼ばれるやうになつたか、そのいきさつについては勿論知らう筈がなかつたが、あの、廢墟のやうにすたれ果てた田舎町のいつも夕闇のやうに暗い家の中へ、ぱつと花濃い花の咲いたやうな美しい人が、自分の義姉として伴れて來られたときの、目の覺めるやうな氣持は今でもはつきり覚えてゐた。

『三千子。』

と、その時兄の輝夫は少しきまりが悪さうにして、三千子に、東京から伴れて來たのだといふその人を引きあはせた。

『これがお前の義姉さんだよ。これからこの人がお前の義姉さんになつてくれるんだよ。繁子さん、これが妹だ。』

『まア、可愛い方、あなたが三千子さんなのね。お噂は兄さんからうかつてました

わ。」

美しい人は、かういひながら三千子の両手を捉へて、自分の胸に引きよせるやうにした。三千子ははにかみのために眞赤になりながらも、一方では思ひがけない嬉しさで、わくわくとした。だけど眞實か知ら？こんな綺麗な人が本當に自分の義姉さんになつてくれるのか知ら？と何だか信じられない氣もした。

「は、は、は。三千子の奴はにかんでゐるんだな。」

兄が傍で笑ふと、

「ね、三千子さん、仲よくませうね。姉さんにしてくださいね。」

と、美しい人はしつかりと自分を抱きしめてくれた。いひ匂ひが鼻をつまらせるやうだつた。花のやうな綺麗な人だから、花のやうにいゝ匂ひがするのだらう、とその時三千子は思つた。

でも、こんな綺麗な人はこんなきたない家にはゐてくれないだらう？ 兄さんは、

義姉さんを伴れてまた東京へ歸つてゆくのだらう？ とそれを不安に思つてゐるが、その心配は無用だつた。兄はその儘家にゐた。義姉もそのまゝ家の者になつた。三千子の家は、穀屋をしてゐるが、兄が米俵を解いて米をはかつてゐると、義姉も糠だらけになつて、その手傳ひをした。店に坐つて客の應對をしたり、帳面をつけたりして、義姉は朝早くから夜遅くまで、本當によく働いた。女學校を卒業してまだその上の學校へもはひつて、東京の家では大へんなお金持のお嬢さんだつたといふ義姉が、そんな風に働いてゐるを見ると、三千子は子供心にも濟まない勿體ない氣がしてならなかつた。

三千子の父や母も、はじめのうちは兎も角も、だんくその嫁を氣にゐるやうになつた。

『なかくしつかりしてゐる。感心な者だ。』

と、父がつぶやいてゐるのを三千子は聞いたことがある。

「長いことはなからうと思つてゐたが——直ぐに逃げ出したらうと思つてゐたが。」

父はこんなふうにもいつてゐた。それ程に思ふなら、何故もつと義姉さんをいたはつてあけないのか、まるで逃げ出すのを待つてでもゐるやうに——意地の悪いお父さん！

と、三千子は一人で腹を立てた。

本當にいゝ義姉さんだつた！ あの人がどんなに自分を可愛がつてくれたらう？と三

千子は今、たまらない懐しさでその義姉のことを思ひ出すのであつた。

義姉は、時々三千子を自分のときめられてゐる二階の部屋へ呼び入れた。そして、

「今少し暇なのよ。二人で遊びませう。」

といつては話をして聞かせてくれたり、人形の着物をこしらへてくれたり、女學校で習つたといふ英語の歌を教へてくれたりした。義姉は非常に美しいソプラノの持ち主だ

つた。「サンタ・ルチャ」といふ歌をよく歌つた。

「大きな聲を出して、叱られるといけないから。」といつて、そつとそれを歌つてゐるところへ兄がにこくと笑ひながらはひつて來ることもあつた。兄がはひつて來ると、義姉は少し赧い顔になつて歌ひ止めてしまふ。

「どうして止めるの。」

兄が笑ひながらなじつた。

「あなたに聞かせるのぢやないのよ。」

「どうして僕に聞かせないの。」

「どうしてでも、あなたはあちらへいつていらつしやい。ねえ、三千子さん、兄さんなんか邪魔だわねえ。」

義姉はさういつて笑つた。——父や母の前ではあまり口も聞き合はない義姉と兄とが、

そんなふうになり打ち解けて語りあつてゐるのを見ると、三千子も何となく嬉しかった。そんなふうな日が一年ばかり續いたが、兄の健康がそのうちにだんく／＼いけなくなつた。元來學問で身を立てるつもりであつた兄が、大學を中途で止めて田舎の家へ引こむやうになつたのは、義姉とのことも少しは關係があるらしかつたが、主として健康のせるだつた。家に引こんで、全く學問を捨て、香氣になつてゐるうちに、少しは丈夫になつたらしいと思つてゐたが、またいけなくなつた。その冬の風邪がこぢれると、熱に細りながら血を吐いて、僅か二月足らずで兄はたうと死んでしまつた。兄の病中の身を粉にしての看護、死骸に取り纏つての物狂はしいばかりの歎き、兄の葬式がすんだその夜から、義姉もまた枕の上らぬ病人だつた。高い熱のなかで、謔言に兄の名を呼んだ義姉は、兄の後を追つて逝く人かと思はれたが、どうやら回復して起きあがれた頃に、東京の家から義姉の父が迎ひに來た。兄が死んだ以上、義姉の身體はもう此處には用がない筈で

ある、一日も早く連れて歸りたいといふのが、義姉の父の申出であつた。

義姉はせめて一週忌が済むまではといつてゐたが、義姉の意志は通らなかつた。迎ひを受けてから十日ばかりの後、義姉はたうとう東京へ歸つてしまつた。歸るといふ日の二三日前に、三千子は義姉に伴れられて、兄の墓参りにいつた。墓は町端れの山裾の丘の上の、お寺の後の森蔭にあつた。卒塔婆の色も生々しい兄の新墓の傍には、白く淋しく山茶花が咲いてゐた。義姉は墓の前に立つて、袂を顔に當て、しばらくの間泣いてゐた。三千子は義姉と一緒に泣きながらも、その時の義姉の悲しみのために聖らかなさを加へた美しい姿を、一枚の繪のやうに眺めたのである。

義姉が歸る時は、三千子も町の停車場まで出來ることなら乗換になつてゐる途中の驛まで送つてゆくつもりだつた。が、その日學校から歸つて見ると、もう義姉は家にはゐなかつた。そして一通の手紙が小さなふくさ包みと一緒に三千子に残されてゐた。その

手紙にはその時尋常四年生であつた三千子にもよくわかるやうに次のやうに書かれてるた。

三千子さん、私は歸ります。送つて頂くお約束でしたが、急に迎ひが來ましたからこのまゝ歸ります。學校へ一寸お寄りしてお別れをしようとも思ひましたが、却て悲しくなりますから思ひ切つてこのまゝ歸ります。東京へ歸つても、三千子さんのことは忘れません。死んだ兄さんのことも私は一生忘れないつもりでございます。お墓参りには時々來たいと思ひますが、しかし、それはむづかしさうです。私の代りに三千子さんがよくお墓参りして下さいませ。長い間仲よくして頂いて、これでお別れするのは本當に悲しうございます。でもまたいつか會へるかもしれない。その時を楽しみにしてをります。これはつまらない物ですが私の形身に差し上げます。これは、私が死んだお母さんから頂いたものです。

私は丁度三千子さん位の時に、お母さんを失くしたんです。三千子さんはお母さん、お父さんがお揃ひですからお幸福です。お父さんお母さんに三千子さんからどうぞよろしく。

三千子様

繁子

ふくさ包みの中には、マホガニー製の、蓋に銀を張り、銀に細かな彫を入れた小さな手箱が包まれてゐた。そして箱の中には、義姉の學生時代に撮したらしい寫真が一枚入れられてあつた。

.....

今、叔母の家の、あの死んだ兄がゐるといふ部屋窓際の机によりかゝつて、三千子はなつかしく悲しい義姉の思ひ出を繰り返した。三千子は机の抽斗から義姉に貰つたあの銀の箱を出すと、それを机の上においた。そして、その中の寫真を取りあけてぢつ

と眺めた。かうして、時々義姉の寫眞を出してちつと眺めるのが、別れて以來二年あまりの間の三千子の習慣であつた。

あれからどうしたのか、義姉からは何の消息もなかつた。三千子の方から手紙を出さうと思つたことも度々だつたが、どういふわけか三千子の親達はかたくそれを禁めた。もう縁が切れてしまつてゐるのだから——と三千子の母は手紙などを出してはならぬわけをくれぐれも三千子にいひきかせたのである。で、三千子は手紙は出さなかつたが、しかし、縁が切れてしまつたとはどうしても思へなかつた。あの人は矢張私の義姉さんなのだから、私があの人を忘れずにあるやうに、あの人だつて私を忘れずにあるてくれるに違ひないわ——と三千子は、思ふのであつた。

あの人は東京にゐる。私が東京へ出て來てゐることを知つたなら、あの方はどんなに喜んでくれるだらう？ さう思ふと三千子の胸は躍つた。

三千子は、その、もう大分薄くなつた寫眞をとりあけて

『義姉さん！ 義姉さん！』

と小さい聲で呼んでみた。そして二年振りでのめぐりあひの光景をさまざまに小さい胸に描いてみた。

『あら、三千子さんなの、まアお久し振りねえ。』

さういつて、自分を抱き取つてくれるであらうあの優しい義姉さん——それを思ふと、三千子はもうゐてもたつてもゐられなくなるのであつた。

墓 参

どうかして義姉さんにあひたい！ 三千子はたゞそればかりを思ひつゞけた。小石川區××町×丁目××番地——その住所もちやんと諧記してゐる。訪ねていつてみよう

と思つたのは幾度だつたか知れないが、いざとなると、三千子は勇気が挫けた。手紙のやりとりでもしてゐればだが、あれからふつつりと互ひに消息をたつてゐる。二年といふ歳月は短くても運命の歩みは早い。もしかしたら義姉さんはもう外の家へお嫁にいつたのかも知れない。そんなことは無い——とは思ふけれど、しかし、どうかわからな
い。もしさうだつたら訪ねていつても無駄だ——。

こんな考へが、三千子の決心をにぶらせるのであつた。

だが、三千子は、學校への往復の。道を歩きながら、電車に乗降しながら、いつも一つの期待を抱いてゐた。あの人も東京にゐる。自分もかうして同じ東京の土をふんでゐる。だから、かうしてゐるうちに、何時ひよっこりとめぐりあはないものでもない——
めぐりあひ！

三千子は、なんとなく小説的なロマンチックなひびきを含んだこの言葉を繰返した。

ところが、ある日のことだつた。もう、はつきりと夏を思はせるやうな強い日が、きらりと青い空に輝いて、セルでは暑すぎるくらゐの午後のことだつた。土曜日の歸りを、三千子は、いつものやうに省線の電車に乗つて、濠を渡つてくる風にすこしのほせ
氣味の頬のほてりをふかせながら、膝の上に教科書をひろけてゐた。——が、妙に心が
落着かず、やゝもすれば、眼は頁の上をはなれてあてもなくさまよひだした。

ふと、彼女は、向う側の、彼女の位置とは對角線的にむかひあつてゐる席に腰かけて
ゐる一人の若い女に眼をとめた。刹那、強い電流にでもふれたやうな衝撃を全身に感じ
た彼女は、思はずはじかれたやうに身を浮かした。

「義姉さん。」

三千子は、思はずかう叫ぼうとした。が、辛うじて口もとのところでその叫びをせき
とめた——矢張——さうでは——なかつた。

三千子は、瞬間のまどはしから我にかへつてほつとしながら少し赤くなつた。——だが、なんとといふよく似た姿だらう？ あの青白い細面でも、房々と黒い髪でも、稍々窪み氣味の、深い静かな眼眸でも、高く通つた鼻すぢでも、それから朱の點をうつたやうな小さい唇でも——いやさうした眼鼻立ばかりでなく、すんなりとした頸筋や、すらりとした撫肩や、全體の恰好からして、みればみるほど、あの義姉さんにそっくりである。たゞ、違ふのは——義姉の顔にまぎれもない一つの特徴であつた頬の黒子がないことだけ、それだけである。

「眼の下にあるのは泣黒子つていふのよ。——その黒子のある人はね、一生に一度うんと泣くことがあるんですつて、今それが判つたわ。」

義姉の繁子はさういつてゐた——その、眼の下の黒子が、その女の人にはなかつた。それに、よくみると、その女の人はまだ若かつた。義姉さんはあんなに若くはない。

矢張さうでは無かつた。三千子はがっかりした。——が、どうしてこんなによくにてゐる人があるのだらう？ ——自分が、餘り、義姉さんに會ひたがつてゐるので、意地悪の神さまかなにかが、一寸自分を擲擄ふために、こんな人を自分の前につれてきたのか知ら？ それとも、自分の思ひなしから、半ば幻影をみる思ひで、こんなにまで似た面影を眼に映すのではなからうか？ 三千子はさまざまに思ひ亂れながらも、眼は、その人に釘づけにされてゐた。

と、その人が此方をみて、慌てゝそらす隙もなく、凝視する三千子の視線はその人の眼に捕へられた。四つの眼は、瞬間——いや、瞬間の十分の一ほどの間だが、ぴたりとそこにあはされた。——が、たゞそれきりだつた。その女の人は、再び眼を膝の上におとした。その女の人の膝の上には、婦人雑誌かなにかが、頁をひらかれてゐた——。やがて、電車は驛にとまつた。三千子はそこでおりなければならなかつた。

陸橋を渡つて、改札口におりた三千子は、改札係に示すべき乗車券が——袴の紐のところへつけておいた筈のそれがなくなつてゐることに気がついた。

『あら、私——』

三千子は、困惑と、きまり悪さとのために眞赤になつた。

『おとしたんですか？』

若い改札係は、笑止らしく云つた。と、その時、三千子の背後から、

『もし、あなた。』

と呼びかける聲がした。振り返つてみると、美しい顔に笑みを含んで、あの、義姉さんに似た人が立つてゐた。三千子は再びはつとした。二重に赤められた彼女の頬は、赤いチューリップの花弁のやうになつた。

『これ、あなたがお落しになつたのでせう。』

その女の人が差出した手には、自分のおとしたバスがあつた。

『ありがたう！』

三千子はお辭儀をしながら受取つた。そして、それを改札係にみせると、逃げるやうに外へでた。

一二十歩來たところで一寸振返つてみると、その人は、クリーム色の洋傘をして靜かに此方へ歩いてゐた。もう一度よくお禮をいはなければ——と思ひながらも、三千子は酷く恥かしかつた。三千子は、で、そのまゝ歩きだした。だけでも三千子は歩きながら考へる。聲まで義姉さんとそっくりだつたわ！あのしつとりとしめりを含んだ少しふるへをおびた聲までも——。

その日の出來ごと以來、三千子は、省線の電車に乗る毎に、なによりもまづずつと一通り車内をみ廻す習慣がついた。もしや、再びあの女の人を見出しはしなからうかと。

だが彼女の期待は空しいまゝに一月あまりがたつて、やがて夏休みも近くなつた。

その、義姉に似た人を、再び電車の中で見出したのは、學期試験がすつかりすんだ日の、ほつとした思ひでの歸途であつた。その人は涼しげな明石に緋の帯をして、前みた時より一層若々しくは見えだが、しかし、相變らず物思はしげな憂鬱な表情をしてゐた。そして手に携へた輪の細かい夏菊の花の花束に、少しやつれの見える顎を埋めるやうにして、ぢつと爪先きを揃へた足元に眼をおとしてゐた。

やはりU驛でおいた。今度は、三千子の方が後だつた。で、三千子はふら／＼とひきつけられたやうにその人の後について歩きだしたが、何處へゆくのか？ その行きさをつきとめて見たいといふ氣になつた。

三千子は、その人に氣づかれぬやう、三四間の間隔をおいて後をつけた。足元をみつ

めるやうにして一歩づゝに想ひを刻むやうにして、その人はゆつくりとK坂を上つてた。のほりつめた處で、とある横町を左へ曲つて、人通りの少い屋敷町の、植込の樹立の緑の蔭のなかを、クリーム色の洋傘は靜かに揺れて行つた。三千子は、氣づかれしまいかと胸を轟かせながら、しかし根氣よくその後を慕うた。

横町からまた横町へ、更にもう一つの横町へ——その横町といふよりは、むしろ露路はといひたい狭い通りを通りぬけると、今度はやゝ広い路へ出た。其處を右へ折れた突當りが大きなお寺の門になつてゐる。その人は、その門をくぐつて、お寺の境内へとはひつてゆくのであつた。

『おや、お墓参りだつたのかしら。』

三千子は一寸胸をつかれたやうにたちどまつた。——そして、とつおひつ思案にくれながら、十分ばかり其處に立つてゐたが、聽て思ひきつて門内へはひつていつた。

門をはひると、左手に鐘樓が建つてゐた。その鐘樓の下を、あか桶を提げた寺男の老翁を先にたて、静かに歩いてゆくその人の後姿が眼にはひつた。三千子はあやしまれたらどうしよう？と思ひながら、なにかしら不可抗的な力にぐいぐいと引寄せられるやうにして、その人のうしろ姿を追つて、本堂の背後の方へと廻つていつた。

そこは百坪ばかりの墓地になつてゐた。傾いた日が、赤々とさし渡るがなかに、灰曝れた石塔が亂立して、遠く巷のどよみはきこえながら、流石にしんと氣息を鎮めた光景だつた。墓域の一方を割つた禿並木の、黒すみ揺れる梢のあたりで、あの水の底で金の鈴をふるといふ茅蟬が、たつた一つ、まぎれもないたつた一つの聲でないてゐた。

その人は、墓地の中を、碁盤の條のやうに通つてゐる小路の一つを辿りわけて、とある墓の前にたちどまつた。そして、花を供へたり香を捧げたりするその人の、物靜かな動作が、風情ある一枚の繪のやうに、その樹立の蔭に佇んでちつとうちまもつてゐる

三千子の眼に映つた。

空になつたあか桶を提げて先に戻つてきた寺男の老翁は、そこにゐる三千子の姿をみとめると、

『お墓まゐりですかい？』

と、あやしむやうにいつた。

『えゝ。』

三千子はときまぎしながらうなづいたが、その氣配で氣がついたやうに、その女の人が此方を振向いて眼を睜つた。その女の人の眼と、三千子の眼とが、そこでびたとあつた。その女の人の眼にも或る表情が動いた。三千子はそのまゝ逃げださうとしたが、さうも出來ず、進退きはまつたかたちでたちすくんでしまつた。

と、墓參をすましたその女の人は、靜かな歩みを此方へ運んできた。さびしい微笑が

その女の人の顔に浮んでゐた。

『あの——』三千子は思ひきつてかゝ呼びかけた。

何？——といふ眼色で、その女の人はみむかへた。口もとには相變らず静かな微笑を湛へたま——。

『あの——あの——』

と、三千子は、ひどいどもりか啞かなどのやうに口籠つた。何ときりだしていゝか、わからなかつた。

『何か私にご用でございますの？』

女の人ば、あくまでやさしい調子でいつた。

『あなたは私の義姉さんに似ていらつしやいます。』
三千子は、眞赤になりながらかういつた。

『私の義姉さんに？』女の方は、鸚鵡返しにいつた。

『えゝ。——田舎の私の家の——』

女の方は、しばらくの間ちつと三千子の顔をみつめてゐるが、

『あなたは、ちや、黒田さんと仰有いません？』

『えゝ。黒田つて苗字なのでございます。』

『その義姉さんと仰有るのは、繁子といふ名でございませんか？』

『えゝ。繁子といふ名なのでございます。』

『さう？ ぢや、あなたは——』

と、女の方は、突然、ある激しい感情につき動かされたやうに三千子の傍にびたりと歩みよつて、

『あなたの義姉さんは私の姉さんなのよ。まア、さうでしたの？ あなたが三千子さ

ん？」

「義姉さんは？ 義姉さんは？ ——私、義姉さんにおあひしたいのでございます。」

「姉はね——あなたの義姉さんはね——。」その女の人は、さういひながら涙ぐんだ。

「義姉さんはどうなさいましたの？」

「この春、病氣で——」

「病氣で？」三千子の胸は激しく躍りはじめた。

「三千子さん。——あなたのことは姉さんからもきいてみました。姉さんがお亡くなりになる前に、あなたのことを——。」

「お亡くなりになる前に？」と、三千子は、相手の言葉をかきさらつて、殆ど、叫ぶやうにいつた。

「え、。今年の春、亡くなりました。」

「まア！」三千子は、しばらくは涙も出なかつた。彼は、眼も口もほんやりあいたなり、
對手の顔をみつめてゐた。

「今日はお墓まるりに来ましたの。——あなたは、ぢや、何もしらずに姉さんのお墓ま
るりにきて下すつたわけね。さア、せめてお香でもあけてやつて下さいな。」

「繁子の妹は、さういひながら踵をめぐらした。(昭和二年四月)

悲

劇

小學教師の關重雄は、宿直室のうす暗い電燈の下で、先刻から一心にペンを動かしてゐた。一行書いては考へ、二行書いては考へる。漸く五六行書けたかと思ふと、ぴりぴりと引破いて、また新しく書き出す。そんな事を繰返して居る間に、兎に角、原稿紙に三四枚書いた。書いて了ふと、いかにも疲れ切つたといふ風に、椅子によりかゝりに上半身を投げかけて、ほうつと深い溜息を天井に吐きかけた。

今、重雄が書いてゐるのは、いつもの小説では無かつた。小説家志願の重雄は、時々短い小説などを書いて、東京の新聞などに投書するのだつたが、これはそれとは違つてゐた。これは手紙である。自分に反いて、他の男に嫁いで行かうとする女への、悲痛な別れの手紙なのである。

(貞子さん！ お目出度う！ 僕はこのお別れの手紙の第一の言葉として、あなたに心からの『お目出度う』を申し上げます。どうぞ、僕のこの祝福を受けて下さい——) その手紙はこんな風の文句で始められてゐた。而して、愛する者の幸福の爲めに、己の愛を犠牲にする、悲しい、潔い覺悟が、繰返し繰返し述べられてゐた。(あなたを失はねばならぬ日になつて、僕は、自分の愛のいかに深いものであるかを知りました。あなたを失ふことは、僕にとつて堪えがたい苦痛です。死に値するほどの苦痛です。しかし、あくまでもあなたを愛する僕は、この愛の故に、この苦痛をしのばねばならないのです。野口は立派な男です。野口との結婚が、あなたの生涯の幸福を保証するであらうことを僕は信じて疑はないのです。野口と結婚するあなたは幸福です。僕の冀ふところはひとへにあなたの幸福にあるのです。あなたの幸福の爲めに、僕は甘んじて、僕の愛を犠牲にします。僕はあなたを愛するが故に、あなたの幸福を冀ひ、あなたの幸福を冀ふが故

に、自分の愛を犠牲にするのです。この僕の心持は、あなたも十分にわかつて下さるだらうと存じます——。いかにも感激的な調子で、そんな風に書かれてゐるのであつた。

重雄は、それを讀み返して見た。而して、自分の書いた文句にすっかり感動して了つた。そこで、署名をしようと再びペンをとりあげたが、未だ何となく物足りない氣がしたので、次のやうに書き添えた。

(我をして風塵の裡にはしらしめしは御身にこそあれ——これは、或る詩人が戀人に向つて云つた言葉です。僕もこの堪え難い失戀の苦痛を抱いて風塵の裡に去るのです。あなたが、野口家の人となる丁度その頃に、僕は東京に出る事になるでせう。僕は、悲しい初戀の夢を抱いて戦ひの途にのほるのです。僕は、何時何處でも決してあなたを忘れない。険しい世の路に傷き倒れる時でも、あなたの爲めに祝福することを忘れないでせう。)

書いて了つてから、少し月並な文句だなど思つたが、兎に角それで満足だつた。封筒に入れて、宛名を書いて、机の上に置いて、さて、重雄は、ゆつくりと一本の煙草を吸つた。

煙草を吸つてしまふと、彼は扉をあけて、上草履のまゝふらりと運動場に出た。鋼鐵色の空には、高く、小さく一輪の月がかゝつて、月の光は眞晝のやうに冴え渡つてゐた。彼は、胸を張つて空を仰いだ。月の光と、彼の胸に堪えられた悲壯な感激とが、一つになつて揺れるやうな氣がした。

が、運動場を一まはりして、部屋に歸つて来て、再び椅子に腰をおろして、もう一本煙草を吸つて了ふと、彼の心には、何か知ら物足りないものが感じられて来た。これッきり——あの女とも、もうこれッきりで別れて了ふのか、と思ふと、何だかひどく淋しい氣がして来た。

彼は、机の上に頬杖を突いて、ほんやりと考へ込んだ。二年前に、あの貞子と戀に落ちた當時の事などが、思ひ出すともなく思ひ出された。

貞子は、彼が初めて小學教師といふものになつて、此の學校に赴任して來た當時、そこに寄宿してゐた家の娘で、その頃は未だ町の實科女學校に通つてゐた。少女雜誌の愛讀者で、哀しい假作物語にしみじみと涙を流したりする、非常にセンチメタルな娘であつた。あまり美しくはないが、控へ目な、はにかみ勝ちな、それでゐてひどく情熱的な、たとへばツルゲエネフの女のやうな娘だつた。それが、すつかり重雄の氣に入つた。こんな娘と戀をしたら——と、いやこんな娘と戀をしないのはうそだと、重雄は思つた。娘の方でも重雄に心を惹かれた。で、すぐにおあつらへ向の戀になつた。勿論、實際の戀は小説のやうにロマンチックにばかりには行かなかつた。握手、接吻、それから——。二人はいつの間にか身體の關係にまで落ちてしまつた。それが薄々、貞子の親達

に勘づかれると、重雄は體よく宿を斷られた。が、外の宿にうつつてからも、二人の關係はずつと續けられた。

少しヒステリー染みたところもあつたが、貞子は眞剣に戀をする女だつた。激しい情熱に羞恥をもたしなみをも打忘れて蒼ざめふるへ乍ら犇と寄り添つて來る時の、その一生懸命な眼ざしには、むしろ物すごいほどの表情があつた——。

それでゐて一面非常に臆病な貞子は、さうした親の眼を忍び、世間の眼を忍ぶ戀を、常に疾しいものに思つてゐた。だから、一日も早く結婚して呉れるやうにと重雄に請うた。——しかし、重雄には結婚する氣などは無かつた。重雄は、こんなところで、いつまでも小學教師などしてゐるつもりは無かつた。やがて東京に出て天晴れ一かどの作家にならうといふ野心をもつてゐる重雄には、結婚などは最初から問題ではなかつた。自分の前途には、いろ／＼の事が待ち構へてゐる。貞子などよりもすつと美しい多くの女

達も、そこで自分を待つてゐるに違ひ無い。こんな田舎娘の爲めに大切な一生を棒にふつてたまるものか——重雄はさう思つてゐた。

その上、重雄はざつと二年ばかり續いた此の戀にかなり飽きてゐた。殊に近頃、茶屋遊びの面白味などもすこし覺えて來ると、何のトリックもない、唯、泣いて溜息を吐くばかりの貞子が、急にうとましいものに思へて來た。もう少し容貌でもよければだが、それも美人といふには遠い方だし——女の方で熱して來れば來るほど、小うるさい氣がして來て、正直のところ、稍々荷厄介にさへ思はれ出したところだつた。だから、貞子の方に結婚問題が起つたといふ話を聞いても、格別驚きも悲しみもしなかつた。寧ろ、丁度いゝとさへ思つた。愈々、その話が決まつて、しかも貞子の嫁いで行かうとする男が、師範學校時代の同窓の親友で、隣村に住んでその小學校に出てゐる野口恭三である事を知ると、重雄も流石に平氣ではゐられない氣はしたが、しかし、心の中で次のや

うにつぶやいた。——いや、しかし矢張この邊が丁度いゝ幕切れといふものだ！

さて、幕切れの言葉は出来るだけ美しく——さう重雄は思つて、さう思ひながら、今その手紙を書いたのである。

處が、書いてゐるうちに、重雄は何となくかなしい氣持がして來た。そのかなしみをロマンチファイして、小説でも書くやうなつもりで、いろ／＼と書いてゐると、思ひがけない悲痛な感激が——愛する女に、潔く永別を告ぐる者の感激が、何處からともなく彼の胸に來た。それを誇張し潤色して、更にいろ／＼と書いて行くうちに、彼はすっかりその誇張し潤色した感激に酔はされてしまつたのである。

だが、この感激は、運動場を一廻りして來て、もう一本の煙草を吸ふ間に、すうつと醒めてしまつた。而して、感激が醒めてしまふと、ひどくさびしい氣がして、心持が空虚になつた。——彼は、手紙を前に置いたまゝ、ほんやりとした眼で、その空虚を見つ

めるやうにしてゐた。

どうも物足りない。此の一通の手紙を最後にして、これつきりで別れて了ふのは、どうしても物足りない。もう一幕足りない氣がする——。

彼は、二年近くも續いた貞子との戀の、いろ／＼の情景を次から次へと心の中にひろけて見た。貞子がいかに激しく自分を戀してゐたか？ その少女らしい純情で、どんなに深く自分を愛してゐたか？ それを思ふと、貞子が斯うして無造作に自分に背いて行くのが、何となくあり得可からざる事のやうに、そんな筈はないといふやうに思はれるのである。貞子が、急に彼に背いて、よそに嫁く覺悟をしたのは、彼の心が信じられなくなつた爲めに違ひないが、彼は、自分の事は柵にあけて、貞子の裏切を責めずにはゐられない氣がして來た。

重雄は、やがて、その「足りない一幕」を、どう書く可きかに考へついた。

彼は、封に入れて出すばかりにした手紙を引裂くと、改めて、別の手紙を書きはじめた。

——貞子さん！ あなたは、とう／＼野口の許に嫁くんですね。あなたがどんな顔をして婚禮の席に坐るか？ 僕はその時のあなたの顔を見度いと思ふ。圖々しきものよ！ 汝の名は女なり。處女を粧ふあなたの花嫁振りこそ見物だ。それにしても、野口は何といふ馬鹿な男だらう？ あの男は僕の友人です。僕も友達甲斐に、あの馬鹿な男の爲めに哭いてやりたいと思ふ。——彼は、そんな風の事を更／＼と書き續けた。而して、兎に角、是非もう一度お話ししたい事があるから、明晩十時頃に、この宿直室に、來て貰ひ度いと書いた。最後に（今更これは無理なお願ひかも知れないが、僕は、二年の間のあなたの戀人として、あなたにこの事を要求する。あなたは屹度來て下さるでせうね。）と書いて、すこしほど過ぎるかと思つたが、そのまゝ封に入れた。

而して、彼はその手紙を學校の前のポストへもつて行つて入れた。

その次の夜、重雄は、學校の宿直室で、貞子がやつて來るのを待つてゐた。

貞子は屹度來るに違ひ無い。

あの手紙は、貞子を狼狽させたに違ひ無い。狼狽して、貞子は屹度やつて來るに違ひ無い。

貞子がどんな風の様子をしてこゝにやつて來るだらうか？ 貞子は何んな風に自分に

云ふだらうか？ 貞子の言葉に對して自分は何んな風に答へてやらうか？ 重雄は唇

に微笑を浮べながら、舞臺へのほる前の俳優の様な氣持で、その情景をまざくくと描き

浮べて見た。

『あんな事仰有つて、する分酷いわ！』貞子は顔を兩袖で抑へて泣きながら、こんな風に云ふに違ひ無い。『私、何も自分から進んで結婚なんかするんぢやありません。そんな

事を仰有るなら、何故あなたは、あなたは——。』さう云つて、貞子は、何故、結婚して呉れないのかと自分を責めるに違ひ無い。

『ぢや、あなたは、今からでも僕と結婚して呉れますか？』

『え、あなたさへさうして下さるなら。』

『しかし、あなたの親達は、許して呉れないにきまつてゐる。あなたは、親をも世間をも捨て、僕のところに来て呉れますか？』

『え、あなたさへ——。』あなたさへ本當に私を愛して下さるならといふ意味を、その一ぱい涙をためた大きな眼に籠めて、じつと自分をみつめながら、貞子は屹度斯ういふに違ひ無い。——と、重雄は自信を以て想像した。

そこで自分は、嘆息しなければならぬ。而して、かう云はなければならぬ。『あ、併し僕は駄目です。僕と結婚する事はあなたの不幸なんです。僕はあなたを愛します。』

けれども、僕は決して善良な夫ではあり得ないのです。だから僕は、あなたを愛するけれど、あなたと結婚しようとは思はない。」

それごらんない！　といふ眼で貞子は自分を見ながら、「ちやあ、私はどうすればいいの？」といふ。

「野口はい、男ですよ。野口はあなたを幸福にして呉れます。」と、自分は、冷やかな調子で云ふ。

「でも、あなたにあんな事を仰有られると、私はどうしていいか判らなくなりませう。貞子は斯う云つてすゝりあけるに違ひ無い。」

——この時、窓の下に幽かな足音がして、何人かがそつとうかゝり寄るやうな氣配がした。が、重雄は、自分勝手な空想に夢中になつてゐて、そんな事には氣がつかかなかつた。

——重雄は夢中になつて空想しつゞける。

そこで自分がいふ。「いや、あの手紙は僕が悪かつたんです。つい、昂奮してあんな事を書いて了つたんです。」さう云つて、貞子の肩をやさしく抱き寄せてやりながら、「僕はね、唯、もう一度あなたに逢ひたかつたんです。だつて、あなたは、「では、これきりもうお目にかゝりません」なんて、いやに冷淡な調子で書いて來るんですもの。僕はもう一度あなたを呼び寄せる爲めに、あんな手紙を書いたのです。」——しかし、かう云つて了つては少し正直過ぎるかな？　兎に角、そこで、彼女を安心させておいて、一つ接吻を與へてやるのだ。最後の接吻を——。勿論貞子は拒まないに違ひ無い。而して、貞子は涙に頬を濡らしながら斯う云ふに違ひ無い。「だつて、なまじいお逢ひして、却て思ひきりがつかなくなると思ひましたから、それで、私、いつそもうお目にかゝるまいと思つたんです。たとひ、何うならうとも、私の心はあなたのものよ。永久にあなたのもの

よ。心はあなたに、唯、身體だけをあの人にさしあけるのですわ。』

そこで、自分は、一生女の心に残るやうな何か非常に効果的な文句を——それは未だ考へつかないのであるが——云つてやる。而して一際聲高くすゝりあける女をしつかりと抱いて、

『貞子さん。泣いてはいけません。ね、みんな運命なのです。笑つてきけんよく別れようぢやありませんか。』

しかし、貞子は、なかく泣きやまない。それを種々にすかしなだめて送り出してやる——。

そこでおあつらへ向きの幕切といふものだ——と、重雄は、時々、微笑を浮べながらそんな風の一場面を思ひ描いて見たのであつた。

気がついて見ると、そんな空想に耽つてゐるうちに、いつか、約束の十時はもう過ぎ

てゐた。十時は過ぎてゐるのに、貞子は未だやつて來なかつた。

十時半、十一時——重雄の心はいらくとした。とう／＼十二時になつても、貞子はやつて來なかつた。

あれだけの手強い手紙を見ながら、とうとうやつて來なかつたのを見ると、では、貞子の心はもう本當に自分に背いて了つてゐるのか知ら？——さう思ふと、彼はすつかり、彼女から欺かれたやうな氣がした。勿論、ひどく誇りを傷つけられた氣がする。と同時に、心から、背き去つた女が憎くなつた。彼は、宿直室の冷たい床の中で、悶々として長い一夜を悶え明かした。

その翌日正午頃だつた。その日は、日曜で、彼が下宿してゐる村はづれの寺の縁先にほんやりとしてゐると、使ひ歩きをする婆さんが、一通の手紙を彼にもつて來た。一目

見て、貞子の手紙だと知れた。——重雄は、手早くそれを開いて見た。讀んで行くうちに、彼の顔は、見る／＼色を變へて行つた。

と、そこへ町の方に使ひに行つた寺男が、息せききつてやつて來た。

「先生！ 先生！」と、寺男は、喘ぐやうに重雄に云つた。「先生。町の鳥羽屋の娘が、今朝、井戸へ身を投げて死んだちふぞ！」

「えッ！」重雄は思はず立ちあがつた。

「聞けば嫁入前だちうに、何うしたんだらうな。町ぢやえらい騒ぎだぞ。」

「本當ですか？」と重雄は呻くやうに云つた。而して、おの／＼聲で咳いた。「あゝ、矢張——」

彼は、自分の描いた芝居が、本當の悲劇におはつた事を知つた。

彼は、呆然とした。

二

貞子の死は、いろ／＼に取沙汰されたが、その原因は何人にも判らなかつた。親達にさへ、それは説き難い一つの謎だつた。

重雄は自分が貞子に出した最後の手紙がどこからか出て來て、貞子の死についての自分の責が明かにされる事を怖れてゐたが、幸にしてそんな事も無かつた。が、十日ばかりしてから、野口恭三からの長い手紙を受取つた。恭三は、貞子と遠縁の親戚に當つてゐて、貞子とは幼馴染の仲だつた。そしてずつと前から、少年時代から、ひそかに貞子に戀してゐたのが、漸く念が届いて愈々結婚する事となつた矢先、そんな事になつて了つたのだつた。恭三の手紙は、激しい怒りの文字に充たされてゐた。

——關君、僕は、貞子が僕に遺した手紙によつて、ほゞ貞子がどうして死んだかを想

像する事が出来ました。貞子は、君にもすまない、僕にもすまないから死ぬのだと書いておきました。貞子は、死を以て君への操を貫いたのかも知れませんが。しかし、君は果して、貞子が考へてゐたやうに眞面目に彼女を愛してゐたのだらうか？ 僕は甚だ之を疑ふ。僕に云はせると、君は唯、彼女を誘惑したのです。而して彼女を弄んだのです。彼女を弄んでゐて、彼女を脅迫したのです。つまり君が彼女を殺したのです。恭三の手紙はそんな風に書かれてゐた。而して、僕は、あのかあいさうな貞子の爲めに、いつか君に復讐してやりたく思ふ。勿論、もう君とは友人でも何でもない。僕は君に向つて敢て手套を投げる——と、書かれてゐた。その手紙を讀むと、重雄は青くなつて了つた。本當にその通りだ。おれが貞子を殺したもおんなじだ——重雄は激しい良心の痛みに苦しみながら、恭三の憤りの前に素直に首を下げるより外無かつた。

重雄は、恭三にあて、詫びの手紙を書かうとして、幾度も筆をとつて見たが、どうしても書けなかつた。直接に恭三を訪ねて行つて罪を謝さうと思つたが、それだけの勇氣も無かつた。

彼は、唯、そつと貞子の墓をおとづれて、心から後悔の涙を流すのであつた。あの、ふとした出来心で書いた一通の手紙、それが彼女に死にまでのショックを與へたのだと思ふと、流石に、重雄も、自分の不眞面目の心持を省みずには居られなかつた。おれは、この少女の心を弄んだのだ。而して、この少女を殺して了つたのだ。——さう思ふと、彼は、空恐ろしい氣がした。恐ろしい罪の意識に戦きながら、重雄は、その墓の前に首を垂れた。而して、苦い悔恨の涙を流した。

そのうちに三月ばかりの日が経つた。貞子の墓——それは、重雄の下宿してゐる寺のすぐ近くの林の蔭にあつた——を圍む樹立にも、柔かな若葉が芽ぐんで、小鳥がしきりに鳴く頃になつた。

その頃になつて、重雄は、自分の苦い悔恨の涙が、いつか甘い涙にかはつて来て居る事に気が附いた。而してその悔恨そのものさへが、一種の誇りに似た氣持に地位を譲りつゝあることに氣がついた。

此の墓の下に眠る美しき少女は——と、彼は考へた。(新聞記者がさうするやうに、彼も死者の爲めに殊に「美しき」の三字を與へた。)自分に、その處女の純情を捧げ、死を以て自分を愛したのである。彼女は、自分を愛した。而して、自分に對する愛の純潔を失ふまいとして、敢て自殺を遂げたのである。死を以て自分への愛を保證したのである。お——と、彼は、詠嘆を以て貞子の墓に呼びかけた。貞子よ！ お前にあんな手紙を書いたのは、慥におれの過ちだつた。おれは、今、心からそれを後悔してゐる。貞子よ、ゆるして呉れ！ ——重雄は、じつと眼をつむり、兩手の指を膝に組み合せながら、一三度墓の前をゆきかへりした。而して、心の中で言ひ續けた。——しかし、貞子

よ、お前はその死によつて、お前の姿を深くおれの心臓に刻みつけて了つた。お前は、お前の愛した男の胸に、いつまでも生きて行くだらう！ ——そんな言葉を心の中に繰返す時、重雄は、勝利者のやうに誇らしい氣持にならずにはゐられなかつた。

一人の少女が自分を愛し、その愛の故に命を捨てたと言ふ事實——それは何といふ素晴らしいことだらう？ 而して自分の爲めに死んだその美しい少女の面影を胸に抱いて、斯うしてそのおもひでに泣いてゐる——何といふ浪漫的なかなしみだ？ 重雄は、今や自分が、正しく、一つの悲劇の主人公であることを自覺せずにはゐられなかつた。ところが、ある日の事だつた。例のやうに重雄が、その「自分を戀して、その戀の爲めに死んだ美しき少女」の墓の前に立つて、勝利者のやうな誇らしい氣持の中で「浪漫的なかなしみ」に耽つてゐると、そこへ、野口恭三が、草花などを携へてやつて來た。それを見ると、重雄は、思はず蒼くなつて了つた。しかし、恭三は、思ひがけなくも、

自分から、和解の手を彼にさしのばした。

「關！」と、恭三は、その赤黒い、巖疊な顔に嚴肅な表情を浮べて、重雄に呼びかけた。

「貞子さんの事では、僕も一時はするぶん腹が立つた。餘ッ程、君に決闘でも申し込まうと思つた。しかし、何事も皆、運命なんだ。もう、僕は何とも思つてやしないよ。」

「さうか、僕は、君には本當にすまないと思つてゐる。——しかし本當に君は僕を許してくれるか？」

「僕もする分煩悶したよ。しかし、今は、どうやら僕もその煩悶から脱け出す事が出来た。恨みもし、憤りもしたけれど、考へて見ると、別に、僕が君に向つて恨んだり、憤つたりする理由は無いんだ。」と、恭三は、しほらしく頭を垂れた。「僕は貞子が君に戀してゐる事を薄々知らないではなかつたんだ。だが、僕は、どうしても貞子を欲しかつたんだ。僕が強ひて貞子を望んだのがいけなかつたんだ。貞子を殺した罪は僕にもある

んだ。」

「いや、さう云はれると僕は、何と云つていいか判らなくなる。——いや、罪はたしかに僕にあるのだ。君こそ、貞子の生涯を幸福にすることの出来る人だつたんだ。君達の運命を狂はした責は、たしかに僕にあるんだ。」と、重雄は、思はず感激の涙を浮べながら、「僕はね、君、君に逢つて、どんなにでも君に責めて貰ひ度いと思つてゐたんだ。」

「いや、そんな事はない。僕こそ罪があるのだ。」

「いや、僕がいけなかつたんだ。」

「いや、そんな事はない！」

二人は、互に罪を負はうとし合つた。而して、さういふ自分の心持に、互に感激し合つた。

「僕はね、毎日、かうして此處へ来て、貞子に詫びてゐるのだよ。」と、重雄は、しばらくの無言の後に、かう言つた。

「僕も、今日は、そのつもりで来たんだ。而して歸りには君の許へ寄つて、和解しようと思つて居たんだ。」

「さうか？ 君がさういふ氣持で居て呉れ、ば、僕はこんなに嬉しい事は無い。ありがとう！ ありがたう！」と、重雄は心から感謝して、「ねえ、君！」と、恭三を呼びかけた。「貞子は——貞子さんは、實に立流な娘だつたよ。あの人はね、本當に人を愛することを知つてゐた娘だつたよ。あの人は死んだ。けれども、あの人は永久に僕の胸に生きてゐるよ。いや、僕は屹度あの人を活かして見せるよ。」

「どうぞ、さうして呉れ！」

二人の手は、そこでしつかりと握り合はされた。

而して、二人で貞子の墓に花を手向けて、つれ立つて墓地を出た。——その時重雄の心には、上手に芝居をし了へて退場する俳優のやうな、深い深い満足があつた。

(天正十二年四月)

姉

妹

悲

劇

114

クリスマス・プレゼント

弓子は、片隅の座席に小さく坐り、膝の上に英語讀本をひろけて、一生懸命に復習をしてゐた。學期試験には、あまり彼女の得意でない英語だけが未だ残つてゐた。彼女の毛糸のシヨールに包みのこされた耳朶は、房々とした鬢の毛の間から、小さな花びらのやうに赤らんでゐた。寒いせゐでは無かつた。それほど、彼女は熱心に勉強してゐたのであつた。

彼女の熱心な勉強の爲めには、此の人のこみ合ふ電車の中も、自宅の靜かな部屋と別だん代りは無かつた。終點で降りればいゝので、停留所毎に氣をつけねばならぬといふやうなそんな煩はしさも無かつた。彼女の眼の前には、乗る人降りる人が、入れ交り立ち交りしたが、それとは一向かゝはりなく、彼女はひたすらに頁から頁へと追うてゐた。

が、十頁ばかり進んだところで、彼女は流石に緊張に疲れたので、眼を頁からあけて、見るともなく車内を見廻はした。

座席は一ぱいに塞がり、ちらほらと五六人が吊革にかゝつてゐる程度の混雜を通して弓子の眼が、彼女の席とは丁度對角線になつてゐる向う側の片隅の座席に遣られた時、彼女の眼は、唼一ぱいに大きくみひらかれた。

「お父さん！」

彼女は思はず然う叫ばうとしたが、その聲が口もとまで来てそこで消えた。といふのは、父が、一人では無いらしい事に氣が附いたからである。

彼女の父は、詩人であつた。が、もう双鬢に霜を置くまでに老いてゐた。老いた詩人は、毀れた樂器のやうなものである。彼が歌はなくなつてからもう十年経つ。その上、

彼は若い時から胸の病をもつてゐて、近頃では兎角健康もすぐれなかつた。老い、且つ病める詩人の姿はいたましかつた。が、しかし、古びてはゐるがよく身體に合ふ背廣をすらりとした長身にきちんと着て、少し斜めに冠つた烏打帽の下から長い灰色の髪の毛の端を見せ、それだけは未だ漆黒と云つてもいゝ口髭に掩はれた口もとに、マドロスのパイプを啣へた様子は、その昔の伊達者の名残をとめて、鼻高く、眼涼しく、白哲の長面の、清秀な眉目には、まだ朽ち果てぬ男性美を残してゐた。どんなに多くの人の中にも、すぐに人目に立つほど特色のある父の姿は、いつも弓子をほゝゑましくするのであつたが、その時の父はどうも不思議だつた。父の隣に丁度自分と同じほどの年齢の、自分と同じやうな質素な學生服を着た少女が坐つてゐるが、父はその少女としきりに話をしてゐるのであつた。少女が甘えるやうなしなをして何かいふ。父は優しく微笑しながら、すこし遠くなつた耳を寄せる爲めに頭を傾けて、少女の一語々々にうなづ

く。語る方も聞く方も、唯、その事にのみ氣をとられて、全然周囲を忘れてゐるらしい様子なのである。一體、あの少女は何人なのだらう？ どうして、あんな人をお父様は知つてゐるのであらう？ それも單に知り合ひといふ程度では無いらしい親み深さは、外目には親子とよりは見えないのである。弓子は訝しく眺めてゐるうちに、次第に不安な氣持になつて來た。妬ましいといふやうな心の動きもそこに交つて來た。

『お父さん。』

斯う呼びかけながら、弓子が立ちあがらうとした時、電車が丁度ある停留所に停つた。一としきりざはめき立つた昇降客の爲めに、弓子の眼界は混乱したが、見ると、父とその少女とは、向うの出口から降りようとしてゐるところだつた。——弓子は、不安と、而してある好奇心との爲めに、いや、何だか判らないが不思議な力にひかれるやうに、彼等のあとについて、そこで電車を捨てた。

父とその少女とは、相變らず一心に話し合ひながら、線路を越えて向側に渡つてゆく。而して、その停留所で、N行の電車の来る方向を眺めて立つてゐる。——弓子は、父に氣づかれぬやうにと、彼等の斜めうしろに廻り、二人の様子に全身の神経を研ぎ澄ました。矢張り何か話しつゞけてゐる。が、聲が小さいので言葉はきゝとれない。唯、少女が何か云つた時、父が、眼鏡のつるのところへ一寸手をやつて、すこし顔を仰向けて口を開いて聲のない笑ひを笑ひながら、

『左様か？ なるほど。』

と云つたのが聞えただけであつた。その科も、その言葉も、父の平常の癖で、機嫌のいゝ時に父はその癖を連發した。

見たところ、父はひどく上機嫌だつた。少女は大そううれしけであつた。——その二人の様子が、弓子の嫉妬をそゝり立てた。

電車が来た。二人は乗つた。五六人を間に置いて弓子も乗つた。此の電車は混雑がひどいだけ、それだけ對手に氣づかれぬ便利があつた。尤も、二人を見失ふまい爲めには、それだけ餘計に氣をつかはなければならなかつたが——。

二人は銀座で降りた。そして、ゆつくりと舗道の上を踏んで行つた。リュウマチスで少し片脚が悪くなつてゐる父は、歩く度に、蛇樹のステッキの石突をかちくと鳴らした。少女の靴は輕快にあがつた。

而して、二人はなほ睦しげに話しつゞけてゐる。何といふ睦まじけな二人であらう？ 何をそんなに話す事があるのであらう？

二人は馳つて、T—堂といふ有名な貴金屬店の、きらびやかな飾窓の前に立ちどまつた。そして、何か一言三言語り合つてゐるが、父が先に立つて店に入り、少女がつゞいてはいつた。

弓子は、店の前に立ちとまつた。二人はなかく出て来ない。弓子は、苛立たしくなつた。同時に何となく悲しくなつた。

あとでお父様にうかゞへばいゝ、人のあとを跟けたりするのは下品な事だわ。

弓子はかう自分で自分に云つた。そして、思ひ切つてくるりと踵を旋らすと、今度は、逃げるやうに、もと来た方へひきかへした。

弓子が家に歸つてから、二三分ほどして父がやゝつかれた様子で歸つて来た。

「どちらへいらつしやいましたの？」

弓子は訊いた。

「うん、一寸。」

と、父は言葉を濁したが、にこやかに笑ひながら、衣囊の底をかき探ると、革張の小

さな箱をとり出して弓子の方へさし出した。

「クリスマス・プレゼントだよ。」

「まあ、何ですの？」

「時計だ。型の變つた一寸面白い奴だよ。少し高かつたけれど、まあ奮發しといた。T

—堂にたつた二つきり——いや、一つきり無かつた。今年のクリスマス・プレゼント

——といふばかりでなく、お父様の長い記念になるかも知れないから大事にしてお置きよ。」

箱を開けて見ると、プラチナの側に精巧な細工をした小さな時計だつた。いかにも高價なものらしかつた。

「まあ、とてもいいのね。」

「うん。なかく上等のだらう？ いつまでも長く有つておいで。」

父は切長の眼に優しい微笑を浮かべながら云つた。

「ありがたう。」

と云つたが、弓子はどうも腑に落ちなかつた。それは、T—堂に二つあつた時計に違ひ無かつた。もう一つを貰つたあの少女は？

「お父様。あの方はどなた？」

弓子は、唇まで出かかつてゐたこの質問を、しかし、どうしても口にする事が出来なかつた。

「どうだい？ 氣に入らないかい？」

「いゝえ。勿體無いくらゐですわ。」

弓子は、時計の面を見つめながら云つた。時計に記したアラビア數字が、解きがたい謎の象を弓子の眼の前に描いてゐた。

見知らぬ少女

あの少女は何人なのであらう？ 弓子は氣になつてたまらなかつた。ちらと見たばかりであつたが、その少女の顔はかつきりと刻みつけられたやうに彼女の心に印象されてゐた。色は淺黒い方であるが、すこし面長の輪廓の正しい、上品な眉と、さかしけな黒い瞳と、そして理智的にひきしまつた唇とをもつた美しい少女だつた。自分の父とあんなに親しげに語り、自分と同じ贈り物を得た筈のその少女の存在を何となく許し難いものに思ひながらも、少女その人は、ひどく好もしかつた。あんな人とお友達になれたら——そんな風にも思はれた。

少女のバンドの金具は、たしかS高等女學校の徽章であつた事を弓子はずつとあとになつてから思ひ出した。父に訊くよりも、先づあの人の様子を探る方が——と思つた弓

子は、丁度、自分の友達の一人が、S高等女學校に通學してゐる従妹をもつてゐるといふ話をきいて、その従妹の人に會はせて貰つた。初めて會つた人に對してのきまり悪さをも忍んで、弓子は、年はこのくらゐ、顔容はしかくの人は知らないかと尋ねた。

「色のあまり白くない、長面の？——十六ぐらゐといへばまあ二年生ですわね。さあ？」

と、そのお友達の従妹の人は首をかたむけて考へたが、

「それだけぢやはつきりしないけど——澤田みつ子さんぢや無いか知ら？ もつとはつきりした特徴を仰有つてはいたゞけませんこと？」

「特徴と云へば、全體が皆特徴のやうに思はれる方なんですけど——」

と弓子は、一寸そこで思案してから、

「をかした事を云ふやうですけど、その方なら、私と同じ此の腕時計をもつていらつし

やる筈なんですけど——」

云ひながら、父からクリスマス・プレゼントに贈られたその腕時計を外して見せた。

「あゝ、それならたしかに澤田みつ子さんですわ。澤田さんも、それと同じ時計を持つていらつしやいますわ。」

「さう？ ぢや判りましたのね。」

と弓子は思はず聲をはずまして、

「その方、どんな方で御座いますの。」

「澤田さんなら、學校中でも評判の方ですわ。美しさでも、あたまの宜さでも——その上、非常に文才が豊かで、たつた十六だといふのに立派な詩をお書きになるといふ事ですわ。」

「然う？ その方、そして、どこにいらつしやるんですの。」

「牛込の矢來とかいふ事でした。お祖母さまとたつたお二人で、ずる分淋しく暮らしていらつしやるんださうですの。何でも、御兩親ともいらつしやらない、孤兒だとかいふ事ですわ。」

「まあ、孤兒？」

「え、でも、些とも僻んだりなどなさらない、明るい感じの方よ。」

「矢來のどの邊なので御座いませう？」

「番地は忘れたけど、お友達に知つてゐる人がある筈ですからお聞きしてあげませう。」

と、そのお友達の従妹の人は、親切に云つて呉れた。而して、妙な眼で弓子の顔を見てゐたが、

「あら！ あなたのお顔、あの澤田さんによく似ていらつしやるわ。」
と、頓狂な調子で云つた。

「まあ、そんな事無いわ。どうしてでせう？」

と軽く打ち消したが——而して、それはその場の出鱈目に過ぎないと思つてゐたが、あとになつてから妙にその言葉が氣にかゝつた。——といふのは、なるほど、自分の顔がいくらかその見知らぬ少女に肖てゐるやうに思はれるからであつた。

矢來一番地××號、やうやく知り得たその番地に、澤田といふ家を探す可く、弓子が軽い泥濘を踏みなづみながら、根殻垣の立ち續いた細い横町から横町へと歩いて行つたのは、一月も半ばの、雪の降つた次の日だつた。番地の上に番號があり、町筋もなかなか入り組んでゐるので、弓子はその家を探し當てる爲めに、三十分近くも費した。

「澤田さん？ 澤田さんなら、その横町をまがつて、右から三軒目——門口に終の樹のある家ですよ。」

御用聞きらしい若者に然う教へられて、教へられた通りに行つて見ると、柵のある小さな門に、「澤田」と標札を出した二階家があつた。その家の前に立つと、弓子は急に胸が騒ぎ出した。——そんなに大きな家ではない。が、何となく床しけな感じのする、ひっそりとした住居であつた。

尋ねあてはしたものの、弓子にははいつて行く勇氣が無かつた。無論、この突然の訪問を理由附けるだけの用意も出来てゐなかつた。唯、外ながら様子をうかがひさへすれば——と思ひながら、弓子は、四邊を憚るやうにして、門前に立つてゐた。

と、頭の上で鋭い聲がした。赤ん坊が叫んだやうな聲である。驚いて振仰いで見ると道に添うた垣根と平行に建てられた家の、道に面して日を浴びた二階の南縁の——丁度弓子のあたまの上のところに、青く塗つた一つの鳥籠が下けられてゐた。籠の中には、頭の黄色い一羽の鳥が、濃緑のはなやかな翅の色を浮き立たせるやうにしてゐた。そ

れはインコであつた。鋭い鳴き聲を立てたのは、そのインコなのであつた。

弓子はしばらくその鳥籠を見上げてゐた。すると、障子をするりと開けて、

『ロリトや!』

と呼ぶ優しい聲がした。出て来たのは、臙脂色の羽織を着た少女——あの、父と一緒に電車に乗つてゐた少女だつた。即ち、澤田みつ子だつた。みつ子は、首に白い布を捲きつけてゐた。顔色もすこし青褪め、風邪でも引いてゐる様子だつた。

『ロリトや。』

多分、それがインコの名なのであらう? みつ子はもう一度さう呼びながら、籠の中をのぞき込むやうにした。籠の中のインコと、それをのぞき込む美しい少女と——それが、明るい日光の中に、一幅の繪を描いてゐた。

が、物の氣配に氣がついたものか、みつ子は、ふと、眼を下に放つて、そこにゐる弓

子を見つけた。見上げた弓子の眼と、見下ろしたみつ子の眼とは、その刹那にぴたりと合つた。——あとになつてから、弓子は、何故、あの刹那を捕へて、思ひ切つて

『みつ子さん！』

と呼びかけなかつたらうと後悔する。その時は、唯、何か悪い事でも見つけられたかのやうに、あわてふためき、後を見ずにそこから駆け出してしまつたのであつた。

お友達の従妹に會つて、澤田みつ子の消息を弓子が聞いたのは、それから一週間ばかり経つてからであつた。

『澤田さんは、ずっと學校を休んでいらつしやるんですつて。——何でも、身體がお悪くて鎌倉とかに轉地していらつしやるさうよ。』

と、そのお友達の従妹は云つた。

もう一度、矢來の家へ行つて見たのは、それから二三日後であつたが、轉地したとい

ふのは本當らしく、その家は戸締になつてゐた。

黄帽子インコ

あの、澤田みつ子の事は、いつまでも彼女の念頭を去らなかつたが、弓子は一方ではまた父に對しても注意を怠らなかつた。父に何かの秘密があり、澤田みつ子が、その父の秘密の中に住んでゐるらしい事を弓子が慥かめたのは、父が沈んだ顔をして歸つて來た夜の事からであつた。

『何處へいらしつたの？』

『鎌倉へ行つたのだよ。』

と父は云つた。

『鎌倉へ？ 何しにいらつしつたの？』

「知つた人が病氣になつてね、鎌倉へ轉地してゐるのだよ。」

「然う？」

弓子は、更に、

「知つた人つて、どなた？」

と問はうとしたが、何か知ら怖いやうな氣がして止めた。怖いやうな氣がして――その上、父の酷く憂はしげな様子を見ると、穿鑿的な問を發するに忍びない氣がして、

父は、三日置きか二日置きぐらゐに、「鎌倉」の知つた人の、病氣見舞にも出掛けて行つた。而して打ち沈んでは、歸つて來た。父自身の健康も此頃になつてめつきりと衰へを加へた。

父が鎌倉へ行く時は、朝、弓子が學校へ出かけるとすぐに出かけて、夜は大抵遅くなつてから歸つて來ると、書齋にはいつて安樂椅子に身を沈めて、物も云はずに考へ込

でしまふのであつた。

灰色に亂れた髪の中に白い長い指を突込んで、頭を垂れて、じつと膝の上をみつめるやうにしてゐる父の様子を眺めて、

「お父様。」

と弓子が呼びかけると、

「お、弓子！」

と父は、例のやうに眼尻に皺を寄せて淋しく微笑して見せた。やさしい父である事に變りは無かつた。――が弓子は何となく父が自分に遠い人になつたやうな氣がして悲しかつた。――父には何か秘密がある。しかし、弓子はどうしても、父にそれを問ふ事が出来ないのであつた。

弓子は母を知らない。弓子の母は弓子を生むと同時に死んでしまつたのである。父一

人娘一人の家庭に、家政婦ともなれば、又、弓子には時に母代りにもなつて呉れてゐるのは一人の老いた伯母——弓子の母の姉に當る人——であつた。弓子は、やるせ無く彼女の小さな胸を苦しめて止まぬ疑問を、その伯母に持つて行くより外無かつた。

「をばさま。」

と、弓子は思ひ入つたやうな調子で聞いた。

「お父様がお見舞にいらッしやる鎌倉の御病人といふのはどんな方？」

「さあ、どなたですかね？」

伯母は知らないらしかつた。——而して、別にそんな事は考へて見た事も無いらしかつた。

「をばさま。」

と、しばらく躊躇してから弓子は訊いた。

「お父様は、何か私に隠していらッしやることは無いでせうか？」

「お父様がお前に隠してゐること？」

老眼鏡の下の伯母の眼には狼狽の色が動いた——その質問は慥かに手應へがあつた。

「え、。何か秘密は無いんでせうか？」

「どうしてお前はそんな事をお聞きなのだい？」

「でも、私——」

弓子は、あの少女の事を話して見ようかと思つたが、どういふわけか口にする事が出来なかつた。

「そんな秘密なんかあるものかね。つまらない心配をしちやいけないよ。」

伯母は、ひどく迫つた語氣で、むしろ叱りつけるやうな調子で云つた。それが却つて弓子に、父の秘密を肯定してゐる伯母である事を覺らせたのであつた。

三月のはじめ、もう早春の空がうるみと光澤とをもつて輝きはじめた頃であつた。鎌倉の「知つた人」の病氣見舞に出かけて行つた父は、その夜はとうとう歸らなかつた。そのあくる日遅くなつてから歸つて來た父は、手に鳥籠を提けてゐた。——その籠の中には、黄帽子インコがゐた。

「まあ、これどうなすつたの？」
それを見ると、すぐに、あの矢來の家の二階の縁の、一幅の繪のやうな光景を思ひ浮べた弓子は、胸を躍らせながら斯う聞いた。

「鎌倉の病人はとうとう死んで了つた。此のインコはその病人が飼つてゐたのを、わしが貰つて來たのだよ。」

父は涙ぐんだ眼を、書齋の卓の上に置いたそのインコの方へやりながら云つた。インコは場所が異つたので驚いたのか、黒い眼をくるくるとさせて、落着なく、その縁の

翅を羽ばたいてゐた。

「ロリトといふ名なのだよ。お前にあけよう。大事にして飼つてお上げ。」

ロリト！——では矢張あの矢來の家にあるインコに違ひない。「ロリトや」と呼んだ澤田みつ子の聲を耳に浮べながら、弓子はさう思つた。鎌倉の病人といふのはあの澤田みつ子の外の何人であらう？

「御病人は、ぢや、とうとうおなくなりになつたのね。」

「あゝ、死んだのだよ。」

父は額に手をあて、うなだれた。父の灰色の髪は、電燈の灯にきらりと輝いた。

「まあ、お亡くなりになつたの！」

弓子はもう一度繰返した。あの澤田みつ子さんは死んだのであらうか？

「然うだよ。死んだのだよ。」

と父は静かな、しかし、深い哀しみに満ちた聲で云つた。而して、溜息をつきながら半ば獨語のやうに云つた。

「かはいさうに——」

「お父様。」

と、弓子は父の肩に手をかけるやうにして云つた。

「その死んだ方はどういふ方ですの？ どうぞ何も彼も話して下さい。」

父ははつとした眼つきで、弓子の顔を見返した。——と、丁度その時であつた。籠の

中のインコは、黄の帽子を振りたてるやうにして、

「おとうさま。」

と云つた。

「おとうさま！」

「おとうさま！」

と續けて二聲云つた。それは弱々しけな、淋しけな、しかし心からの愛慕のおもひを籠めた聲であつた。

父ははつとした。弓子もはつとした。父と弓子とは眼と眼とを見合せた。すると、インコは、更にその黄の帽子を振つて鳴き立てた。

「おとうさま！」

「おとうさま！」

「おとうさま！」

姉 妹

父から、その秘密を告げられたのは、それから更に十日ほど経つてからであつた。

父は病床に就いてゐた。インコを伴れて鎌倉から歸つたその夜から父は發熱した。而して、父の病勢は益々募るばかりだつた。父は、寢床の上に吊した籠の中のインコを眺めながら、こんな風に弓子に話したのであつた。

「隠して置いたのは本當に濟まなかつた。だが、何時までも隠しておくつもりぢや無かつたのだよ。お前も、みつ子ももう少し大きくなつてから、人間の運命の姿を、もう少しはつきりした眼で見わけられるやうになつてから——と思つてゐたのだよ——知つての通り、お前のお母様はお前を生むとすぐに亡つた。——わしは、お前の母を此上もなく愛してゐた——どうかしてあのやうなよいお母さんを貰つてやりたいと思つて、貰つたのがみつ子の母なのだ。ところがいろ／＼の事情があつて別に暮さなければならなくなつたのだ。みつ子は、お前が生れた次の年の暮れに生れたのだつた。年齢は一つちがひだが、お前は早生れ、みつ子は遅生れだつたのだ。しかし、わしはみつ子も、その母

親とも長らくの間別れてゐた。わしが、もう一度みつ子を自分の子として受取つたのはみつ子が十二の時、つまり今から四年前だつた。その時には、みつ子の母は死んでゐた。みつ子は、祖母と一緒にさびしい、便りのないくらしをしてゐたので、わしが見てやらなければ老人と子供とは路頭に迷はなければならなかつたのだからな。お前は、わしがお前の外にもう一人の娘を有つてゐたのだと知つたら——わしを父と呼ぶ者が、お前の外にもう一人あつたのだと知つたら、氣持を悪くするかも知れない。わしに裏切られたやうな氣がするかも知れない。だが、心を廣くもつて、わしをも、又、わしを父と呼んだあの娘も、ゆるしてくれ。あのかはいさうな娘は、いつも、わしの訪ねて行くのを待ち兼ねて、空しくわしの名を呼んでゐたのだ。あれが病氣にならぬうちには、わしは、ほんの稀にしか、一月に一度か、三月に二度ぐらゐるしか、あれを訪ねてやらなかつたのだからな——あれは、空しくわしを呼んでゐた。ロリトが、「おとうさま」と云ふだらう。あ

れは、みつ子の口眞似なのだよ。あの聲が、どんなに淋しいかなしいものであるかは、お前にも聞きわけられるだらうがね——』

父はこゝまで、話して来て、苦しげに息を繼いだ。

『おとうさま！』

と、その沈黙を充たすやうに、而して、今、父の云つた言葉を證據立てるやうに、淋しい悲しい聲でその時ロリトが鳴いた。

『わしは、お前に、あのみつ子を會はせるつもりだつたのだ。だが、あの娘は、あまりに早く此の世を捨て、しまつた。』

父は力無く云ひつゝけた。

『おとうさま。』

と、弓子は抑へかねた感激を以てかう父に云つた。

『私にすまないなんて——お父様はどうしてそんなつまらない遠慮をなすつたのでせうね。ですけど、お父様。私は、そのみつ子さんに會つてゐるのです。』

『會つてゐる？ お前がみつ子に？』

『え、勿論、外ながらにですけど——みつ子さんの方では御存じは無いでせうけど。』

弓子は、そこで、クリスマスの三四日前のある日に電車の中で、父と一緒にゐるみつ子を見かけた事だの、矢來の家を探して、門口まで行つて見た事だの——それ等の事を父に告げた。而して云つた。

『あの方は本當に好きな方でしたの。私、あんな方とお友達になれたらどんなにかい、だらうと思つて居りましたの。』

『さうか？ お前は、そんな風に思つてくれてゐたのか？』

『お友達どころか、血を分けた姉妹だつたのね。あの方が妹で、私が姉さんだつたの

ね。」

『さうだ。お前が姉さんだつたのだ。』

『私のかはい、妹——みつ子さん！ だけど、もう、あの方は死んでおしまひになつたのねえ。』

『あゝ死んでしまつたのだ。——お前が、そんな風に思つてくれたと知つたら、あれはどんなによろこんだらう？』

と、父は涙ぐましく云つた。

『私といふ姉がある事を、あの方は知つていらつしつたのでせうか？』

『それは知つてゐた——而して、會ひ度がつてもゐたのだよ。』

『どうして會はして下さらなかつたの？ いけないおとうさま！』

と、うくすゝりあけてしまつた弓子は泣きじやくりながら斯う云つた。

『矢張り早く會はせた方がよかつたのだね。』

父は、かう云つて眼を閉ぢた。

春の夜は、柔かな灯影の下に靜かに更けて行つた。
籠のロリトが、もう一度鳴いた。

『おとうさま！』

(昭和元年十二月)

泥

灣

「まあ、どうしよう！ 矢張、お母様に云はれた通り、下駄をはいて来れば宜かつたのだわ！」

光子は、エルトの草履の足もとを、ひどい泥濘に踏みわづらひながら、斯う獨言つた。停車場を出ると、思ひの外道の悪いのに驚いたが、それでも、そこまでは然う酷くは無かつた。

乾いたところを拾ひ拾ひ、どうにか、草履をよごさないで歩いて來れた。が、もうすこしといふところになつて、この思ひがけない泥濘だつた。

光子は溜息をつきながら、その午過ぎの日に、きらきらと錫色に輝いてゐる路面を見渡した。どういふわけか、そこだけがとりわけ酷くなつてゐるその泥濘は、十間ばかり

も續いてゐた。——光子は、それが、自分の訪問を妨げるために、故意にこしらへられてある泥濘であるやうな氣がしてならなかつた。

「矢張、止めようか知ら？ けふの訪問は止めて、こゝから引返してしまはうか知ら？」

光子はさう心に咬いて見た。が、折角、思ひ切つて出て來た事を考へると、このまま引返すのも残念だつた。

光子は、思ひ切つて泥濘の中に足を踏み入れて見た。二足三足あるくうちに、草屬の爪先はむざんに泥にまみれてしまつた。が、そのよごれを氣にしなければ、どうやら歩いて歩けない事は無かつた。

光子は、一足一足と、その泥濘を踏みわづらひながら、心では、家を出る時から考へつづけてゐた物思ひをつづけてゐた。

泥濘は、光子の心の中にもあつた。光子は心のなかの泥濘を、一足一足と踏みわづらふのであつた。

——光子が今訪ねて行かうとするのは、女學校時代の仲好しの——此の四月まで、同じ教室に机を並べてゐた時子の家であつた。つい此間までは、一週間に少なくとも二度ぐらゐは屹度たづねた時子の家、「訪ねる」といふやうな改まつた意識無しに氣安く訪ねた時子の家。その時子の家を訪ねるのに、今日はまあ、どうして斯のやうにむづかしい氣がするのであらう。その辛い辛い氣持は何故であらう。

あの時子さんのお兄様の勇さんが御結婚なすつたから——

だが、勇さんが御結婚なすつたところで、それが何だらう？ あの方も、もう大學を御卒業なすつたのだし、年齢だつて二十五か六におなりになつたのだし——御結婚なすつるに何の不思議があらう。あの方の御結婚が、自分に何の關係があらう？

本當に、私、一體どうしたといふんだらう。あの方が御結婚になつて、美しいお嫁さんがおいでになつたところで、私は矢張時子さんのお友達やあ無いか？ 勇さんが御結婚なされると、それきり、ぱつたり訪問を止めたりして——時子さんがへんにお思ひになるのも無理は無いわ。私、何て馬鹿だつたのだらう？

光子は斯う心の中に繰返して見た。が、光子の歩みは矢張、滞り勝ちだつた。光子の歩みが滞るのは、ただ、路が悪いからばかりではなかつた。泥濘は、寧ろ光子の心の中にあつた。

本當に、勇さんが御結婚なすつたところで、それが私と何の關係があらう？

時子は、もう一度然う云つて、自分で自分を納得させたが、しかし、その納得にはどうしても無理があつた。

あの、勇が、結婚するといふ話を、時子の口から聞かされた時の驚き！ その驚きか

「我に歸つた時の、あの淋しいみじめな心持！ 今にまだ彼女の心に尾を曳いてゐるその時の心持が、泥濘に行きなやむ光子の心に、もう一度呼び返された。同時に、時子と同じやうに、自分をも妹のやうに愛して呉れた勇のその折々の懐かしい姿が、それからそれへと思ひ浮べられるのであつた。

女學校へはひるとすぐに、光子は時子と仲好しになつた。そして、繁々と時子の家に遊びに行くうち、光子は時子の兄の勇と、時子同様、妹のやうな氣持で馴れ親むやうになつた。時子の爲めに優しい兄であつた勇は光子の爲めにも同じやうに優しい兄だつた。勇は、時子を「時ちゃん」と呼んだ。光子をば「光子さん」と丁寧と呼んだが、いつの間にか「時ちゃん」と呼ぶ同じ調子で、「光ちゃん」と呼ぶやうになつた。光子にはそれが嬉しかつた。女學校も半ば過ぎて、童年期から處女期に入るやうになつてからは、光子はともすれば勇の前に顔を赧らめる事があつた。妹としての時子の無邪氣さ

とは、歩調を合せて行けないやうな或る心持を、光子は勇に對して感じはじめたのだつた。同じやうな心の動きが勇の方にもあつた。

「光ちゃん！」

時子の居ないさしむかひの時に、ぎごちない沈黙を破つて斯う呼びかける勇の聲には異様なひびきがあつた。

「僕ねえ。あなたにお話したい事があるのですよ。きいて呉れますか？」

光子は、わつと騒ぎ立つ胸を辛うじて押鎮めながら、耳朶を赧くしてうなじを落してゐた。勇は、その光子の肩にそつと手を置いて、

「ねえ。きいて呉れますか？」

光子は、僅かにうなづいたが、そのうなづきは、勇に通じなかつたらしい。勇は、光子の肩から手をのけると、

「でも、今は止ませうね。もう少し経つたら——ね。その時はどうぞ、僕のお願ひを一度は耳に入れて見て下さい。」

それつきりで、勇は何も云はなかつた。

が、ある時は、面白いから読んでごらんさいと云つて一冊の本を貸して呉れた事があつた。読んで見ると、熱烈な戀愛小説だつた。——そんな風な、暗示に對して平氣で居れる光子では無かつた。光子は「一度は耳に入れて見て下さい」といふその勇の願ひが何であるかを考へて胸を躍らした。そして、若し、その願ひが打明けられたら——と半ばは怖れに似た心持で、待つともなしにその時を待つてゐた。勿論、それに對して、どういふ返事をしたら宜いかと、はつきり心を決めてゐたわけでは無かつたが——

だのに、突然、勇の結婚の話を聞いたのであつた。しかも、もう、すぐに結婚の式をあけるといふ間際になつてから——

「私も本當にびつくりしたの。まるで寢耳に水なのですもの。私にだつて、一言ぐらゐは相談して下さつても宜さうなものなにつて、私、怒つてやつたのよ。」と、時子は心から腹立たしさうに云つた。

「行きがかり上、仕方が無くなつたんだつて、兄は云つてゐました。兄も、然う氣がすすんでゐるのでは無いらしいの。此の結婚は、結局、不幸かも知れないと思ふのよ。」

そんな風にも云つた時子の顔には、何となく、自分に向つて辯解するやうな、また、自分をなだめようとでもするやうな表情があつた。實際、その話を聞いた時の自分は、急に暗い淵にでも突き落されたやうな氣がしたのだもの——と、光子はその時のみじめな自分を思ひ返すのであつた。

「だけど、それが自分にとつて本當に何だらう？ 自分があの勇さんに戀してゐるといふのでもなし、勿論、誓つたと云ふのでもないのに——」

勇さんが結婚なすつたからつて、勇さんは勇さん、時子さんは時子さん、時子さんは時子さんぢやあないか？
時子さんは私の仲好しのお友達ぢやあないか。その時子さんが、しかも、病氣で寝てい
らつしやるといふのに、こんなに長い事御無沙汰するなんて、本當に私悪かつたわ！

光子は、斯う心の中で云つて見た。そして、自ら勵ますやうにして歩みを續けた。泥
濘はいつか通り過ぎてゐた。

二

「まあ、杉本のお嬢さま。」

出迎へたのは、長い馴染の老婢だつた。老婢は久振りの光子の訪問を心から喜ぶやう
にして、いそいそと時子の部屋に光子を導いた。広い割合に無人な家うちは、ひつそり
と鎮まりかへつてゐた。いゝ鹽梅に、勇は留守らしかつた。若しかしたら、その新妻な

る女の人に顔を合わせるかも知れないと、緊張した心構へではゐたが、その人も今日は留
守らしかつた。

「ほかの皆さんはお留守？」光子は、しかし、念の爲めに廊下を歩きながら老婢に訊い
て見た。

「はい。旦那様も奥様も、朝から御一緒にお出ましになりましたので——」

「さう？」光子は、ほつと安心した。

部屋にはひると、青白くやつれた顔をして寝てゐた時子は、

「まあ、光子さん！」と云ひながら、蒲團の上に取りあがつた。

「本當に御無沙汰したわね。私、鎌倉の方に行つてゐたものですから——」と、光子は
何よりも先づそれを辯解してから、思つたよりも衰弱してゐる時子の顔を打眺めて、
「まあ、こんなにお悪かつたの？」と、早くも涙ぐましい調子になつた。

『いいえ。もう、これで大分よくなつたのよ。』
と、時子は淋しく笑つて、『本當によく訪ねて来て下さつたわね。私、會ひ度かつたのよ。』

數へて見れば二月振りだつた。その二月が二年程にも思はれる。二人は相抱くやうにしてその久瀾の額を見合せた。

『私、もう、光子さんは来て下さらないのかと思つたのよ。——でも、よく来て下さつてねえ。』

『御免なさいね。私、疾うにおうかがひする筈だつたのですけど——』

『私、何だか心細いのよ』と、時子は、感傷的な調子で、『此頃、まるでひとりほつちなんですもの。』

『ひとりほつち？』

『ええ。さうなの。それはえ、兄さんも姉さんも優しくはして下さるのですけれど。』

姉さん——といふ言葉が、光子の胸に強く響いた。光子は、一度見た事のある美しい人の姿を思ひ浮べた。何となく心臓が熱くなるやうな氣がした。

『兄さんも、優しくして下さる事は下さるのですけど、矢張、前のやうな兄さんちや無くつてよ。だから、私ひとりほつちよ。』

『まあ！』

『兄さんを失くして了つた上に、たつた一人のお友達の光子さんまで失くして了つたかと思つて、私、本當に悲觀してゐたのよ。』時子はさう云つて淋しく笑つた。

『だつて、私は何時までもあなたのお友達よ。』

『どうぞね。どうぞ、私を見捨てないで下さいな』時子は、光子の手を握つて、

『私ね、光子さん。あなたが若し、私の姉さんになつて下さつたら——と思

ふのよ。そしたら、どんなに私しあはせだつたかと——でも、今更、そんな馬鹿な事を考へても仕方が無いわねえ？」

「まあ！ あなたはへんな事を考へる人ねえ。」

と、光子はいくらか赧くなりながら、わざと聲をあけて笑つた。が、堪へがたい思ひが、つらくその胸を掻き亂した。

一時間ばかり、いろいろの話をしてから、光子は、もう少しと引きとめる時子に、又の訪問を約して暇を告げた。もつと居度かつたのだが、愚圖々々してゐるうち勇達が歸つて来て、その睦まじい二人と顔を合せる事になると可厭だと思つたので。

が、時子の家を出て、その泥濘の道にかゝつた時、一臺の自動車がむかうから走つて来た。路傍に避けながら、ふと、その自動車のなかを覗き込むと、肩を寄せ合せて坐つ

てゐる若い二人は、勇と、その新妻だつた。光子は、はつとした。が、何か餘念なく語りあつてゐるらしい二人は、光子には氣がつかなかつた。自動車は、夥だしく泥汁を飛ばしながら、光子を掠めて走り過ぎた。

光子は、泥濘の中にたたずんだまま、自動車のうしろ姿をぢつと見送つた。くわツと全身が熱くなるやうな氣がした。

だつて私、別にあの人を愛してなぞ居やしなかつたのに——と、自分に云ひきかせて見ても無駄だつた。彼女は、自動車を避ける拍子に泥濘の深みに踏み込んで眞黒に泥に染まつた片足に眼を落しながら、熱い涙が胸の底からこみあけて来るのをどうすることも出来なかつた。

(大正十五年九月)

親

友

晚餐が済むと、私は二階の廣縁の藤椅子に身體を横たへて、ほんやりと煙草を吸つてゐた。浴衣の肌にはひえんと沁みる風が、もう争はれぬ秋を感じさせた。私は眼をあけて、空を見た。銀河が一すぢ灰白く流れて、きら／＼と冴えた星の影にも、露ッほい冷たさがあつた。

つゝましやかな聲を立て、夫人があがつて來た。夫人は、紅茶の盆を捧げてゐた。「御退屈でございませう？」と、夫人は、片頬に微笑を浮かべ乍ら、「でもすぐ歸つてまいります。時々、こんな事がございまして、此の職業もらくではございませぬ。』

「本當に大へんですね。遠いんですか？」

「いえ、一里たらずのところでございます。それに自動車以利きますから往復は何でも

ございませぬ。——すぐ歸つてまゐりませう。」と夫人は繰返した。山邊は今夜、晚餐の最中に、病家からの急使を受けて、箸を投げて出かけて行つたのである。

「併し、商賣繁昌で何より結構ですよ。尤も山邊君など、この土地にはすこし過ぎものなんでせう。だから、引張帆になるのはあたり前でせうが——」

「本當に少し忙し過ぎるのでございますよ。折角、久振でいらしつて下さつたのに、おちついてお話をしてゐる間もないつて、こぼして居りますんでございますよ。』

「いや、もうこれだけ話せば、思ひ残す事はありません。」と、私は笑つて、「尤も、話しても話しても話し足り無いやうな氣はするんですが——。何しろ十幾年振で逢つたんですからなあ。』

「あなたからいらッしやるつて御手紙を頂きますと、もう毎日々々お待ちして、十日ばかりといふもの話といへばあなたの事ばかりでございましたの。だからわたし、あなた

にお目にかゝる前に、もうすつかりあなたとお別懇になつたやうな氣持が致して居りましたのよ。『馴々しく云ふ夫人の調子には、女學生の昔を思はせるやうな無邪氣さが見られた。夫人は清楚な感じのする細面の白い頬に、もう一度人なつこい微笑を浮べて、『ほんとに、夫はあなたとは、どんなにまあ仲の好いお友達なんでしょう。わたくし、何だか羨ましいやうな氣が致しますわ。』

『いゝえ、奥さん！』と、私も笑ひながら云つた。『山邊君と僕とがどんな親友であるにしろ、奥さんから羨まれらるほどの親友では無ささうですよ。僕はまた、あなた方御夫婦のお睦じさを、随分うらやましく思つてゐるのですがね。』

『まあ！』と夫人は頬を赤らめて、『そんな事仰有つておからかひになつてはいやでございますわ。』

『いや、擲揄ふなんて、決してそんなわけぢやありません。』と、私は眞面目な調子にな

つて云ひ續けた。『あなた方御夫婦が斯うしてむつまじく暮らしていらつしやる。僕はそれを見ると非常に嬉しいのですよ。夫婦が仲好く暮す――それは當然の『やうな事ですが、此の當然の事が、どうして非常にむづかしい事なのです。世の中にありとあらゆる夫婦の九分九厘までは、皆角突合ひで日を送つてゐるのですからね。圓滿な家庭、祝福された夫婦仲といふものは、極く稀なものです。』

『服部さん、私達の仲が、そんな睦じい圓滿なものにお見えになりました？』

『何故、そんな事を仰有るでせうね？』

『でも、あなたが御覽になるほど、睦じくも圓滿でもないかも知れませんわ。』夫人はさう云ひ乍ら私の顔を見た。その眼は相變らず微笑を湛へてゐたが、その微笑の裡には、何か知らぬ淋しい影が動いてゐた。

『それは勿論、時々夫婦喧嘩もなさるでせうけどね。』私は、夫人の調子が思ひ掛け無

くも眞剣なものになつて来たのを見ると、稍狼狽しながら、その狼狽を冗談らしい口の
利き振りに紛らして云つた。

『いゝえ。喧嘩などした事はございませんの。あの人は、それは辛抱強い優しい人なん
でございますの。あの人は私を愛して下さいますし、私もあの人を——』と、夫人は少
し口籠つて、『あの人を愛しては居りますの。それで、何處か斯うびつたりしない、
たより無いところが御座いますの。』

『さうでせうか？——』と云つたきり、私は、他に云ふ可き言葉も知らないできまり悪
く押黙つてゐた。

『私、こんな事を申上げてはほんとに無躰なんでございますが、あなたは夫の親友でい
らつしやるから、私、遠慮なくお尋ね申上げるんでございますが、夫には——あの人に
は、前に、何か思つてゐた女でもあるのではございせんか知ら？』

然う問はれると、私は思はずくりとした。

『いや、別に、そんな者は無かつたと思ひますがね。』と、私はさりげなく言ひはしたが
その強ひて装つた不自然な調子は、敏感な夫人の眼にとまらない筈は無かつた。

夫人は、それきり何も云はなかつた。立ち入り過ぎた問ひだと反省したのであらう
か？ それとも私から眞實の答を得ようとする事の不可能に氣がついたのであらうか？
別の方面に話題を移して、一言二言の會話を交換してから、夫人は階下に降りて行つた。

なほ、一時間ほど、私はほんやりとそこで煙草を吸つてゐたが、山邊はなか／＼戻つ
て來さうもないので、私は、逗留中の私の部屋に宛てられてゐる、階下の、中庭に面し
た部屋に戻つた。洋風に造られた六疊ほどの此の部屋は、十年前、私が、その家に寄宿
してゐた時、私に宛てられてゐた部屋である。山邊が、きたなくて仕やうがないから——

—と云ふのを、無理に頼んで、私は今度の逗留にもこゝに置いて貰ふ事にしたのである。私は、窓際の卓に向つて腰をおろした。而して、読みさしの小説本を開いたが、二三頁讀むともう欠伸が出た。私は、本を投げ出して頬杖をついた。頬杖をついてほんやりとみはつて居た私の眼には、一人の娘の姿が浮んだ。つやくくと黒い髪を桃割に結つて、紫色の前掛をして、その頃流行つた夢二の繪をそのまゝの、下ぶくれの頬と、夢見深けな大きな眼とを持つた一人の娘の姿——。

『弓子！』

私は、思はず斯う聲に出して呼んで見た。

私が、この親友の山邊の家に寄宿して、一緒に町の高等學校に通つてゐる頃、弓子はこの家で小間使ともつかず、客分ともつかぬ地位を與へられてゐた。山邊の母の従妹の娘とかで、両親とも亡い孤兒の、たよりない身の上だといふ事も、その時分の私の

殉情主義をそゝらすにはなかつた。その頃、山邊は父の業を嗣いで醫者になる事をひどくいやがつてゐたし、私も文學で身を立てようとしてゐた。だから、二人共、學課などそつちのけに、よく小説を讀んでゐたものだが、とりわけ、山邊は、トルストイの崇拜者だつた。トルストイの『復活』は、私も愛讀してゐた。『復活』を愛讀した私は、弓子をあのカテリーナに擬して見たりした。弓子がカテリーナで、而して、自分がネフリユードフで——いや、自分は、決して、あんな不人情な冷酷なネフリユードフにはなまいなどと、他愛もない事をとりとめもなく空想してゐた私は、いつの間にか、秘かな愛を弓子に寄せてゐた私だつた。

だが、奔放な空想家である私は、そのくせ、實際には極めて臆病だつた。心の底では、そんなにも弓子を愛してゐながら、その愛を對手に打明けると云ふ事は、思ひも及ばぬ事だつた。いや、私は、弓子に對しては用事の口一つきく事さへ出来なかつた。私

は、衷心に募り行く情熱を、あくまでも冷淡な外貌に押しかくして、時々、弓子が無邪氣に話しかけたりすると、とりつき端もない、素氣ない挨拶でそれに酬いた。而して、自由なこだはりの無い態度で弓子に對する事の出来る山邊を、どんなに羨ましくも嫉ましくも思つたことであらう？

が、山邊も亦弓子を愛してゐる——私は、戀する者の敏感さで、やがてそれに勘附かすにはなかつた。最初のかすかな疑ひ、それが疑ひならぬ事實である事を立證する一つ一つの發見、私が此の發見の爲めにいかに苦み惱んだか？ その苦みと惱みとは十年後の今も、猶昨日の事のやうに、活々と私の胸に喚び起す事が出来る。

「君は、どう思ふ？ あの弓子を。」と、山邊が卒直な態度でこんな風に私に話しかけたのは、三年の學年試験が終つて、私が郷里に歸省しようとする日の前の晩だつた。「どう思ふつて？」と、私は、戦く心を押鎮めて云つた。

「僕は、あの女を愛してゐるんだよ。母が許して呉れさへすれば、弓子と結婚してもいいと思ふんだ。君はどう思ふ？」

「どう思ふつて？ それは君の勝手さ。」と、私は平氣な顔で云つたが、私はその時、底の知れない暗い穴の中へ、眞逆様に突き落されたやうな氣がした。——私は、その夜一晩中眠れなかつた。私の無二の親友である山邊と、私から凡てを奪はうとする冷酷な掠奪者である山邊とが同一の人間であるといふ事實が、いかに意地悪く私の心を苛んだか？ 私は、悶え、呻き、我と我が髪を掻きむしつた。山邊を殺して自分も山邊と一緒に死ぬ——私はそんな怖ろしい妄想にさへ苦しめられねばならなかつた。

が、私の意志は健氣に働いて呉れた。私は、弓子を思ひ切り、弓子を山邊に委せる事を私自身に納得させた。勿論、これは骨の折れる仕事だつた。が、私は兎に角それに成功した。それに成功する爲めには、私は、弓子や山邊と、一緒に住む事を止めなければ

ならなかつた。私は、山邊の家を出て、寄宿舎にはひつた。

私は、もう半年で高等學校を卒業するといふ時、父の死から結果された境遇の變化の爲に、突然學生生活をうちきらなければならなかつた。同時に山邊との接觸も、今までのやうに密なものではなくなつたが、併し、どんなに遠く離れても、どんなに長逢はずにゐても、その爲めに錆や曇りの出来るやうな二人の友情ではなかつた。

高等學校を卒業して、K——市の醫科大學を出で、父の家と業とを嗣いだ山邊から、結婚の知らせを受取つた時は、私は北海道にゐた。私は、生活の便宜上からその二三年前にある女と結婚してゐたが、私の結婚は最初から呪はれてゐた。私は、どうにも心持の折合へない妻を東京に残して、雪に埋もれた林務局の官舎に、老僕を對手の淋しい朝夕を過してゐたのだが、山邊の結婚の知らせを受取ると、すぐに、あの弓子の事を思ひ出した。山邊は、弓子と結婚したに違ひ無い——私はさう思つて、二人の爲めにひとり

祝杯をあけたのであつた。——ひどい吹雪の夜であつた。私は、窓の隙間から、霧のやうに吹き込む粉雪につめたく頬を撃たせながら、ひとり淋しく、二人の爲めに祝杯をあけたのであつた。

ところが、山邊の結婚の相手は、弓子でなかつた事が、その後の消息で明かになつた。私にとつて、それほど意外な事は無かつた。山邊の結婚したのがあの弓子でないとするれば、では、弓子はどうしたのか？

私は、その事について、幾度山邊に訊いて遣らうと思つたか知れない。が、私は敢て訊かずにゐた。——斯うして、山邊を訪ねて來た今も、私は、未だ訊かないのである。山邊も亦、語らうとしない。する分種々の話が出たが、弓子に就いての事は、どちらの口からも一語も語り出されないのである。私がそれに觸れようとするのは、古創の痛みに堪えないからである。が、山邊はどうしてそれを語らうとしないのであらう？

さう考へて来た時、私の心には、先刻、夫人の云つた言葉が思ひ出された。山邊夫婦の仲に、一つの翳を落してゐる何かがある。その何かは、あの弓子の姿なのではあるまいか？ — 私は、さう考へて見ずにはゐられなかつた。

山邊はなかく歸つて来なかつた。私は、所在無さに疲れて了つて、少し早い寝臺の上になつた。長い間の不眠症も、近頃では大分よくなつたらしく、横になるとすぐにとくとくと眠りに誘はれた。が、眠るとすぐに、私はさまざまの夢に襲はれた。白日の現よりも濃いそれ等の夢の中で、亡靈のやうな朝子の姿を見た。朝子！、何といふ呪ふ可き名であらう。それは、つい此の間離婚したばかりの私の妻の名なのだ。さんざんに私を裏切り、苦めて置き乍ら、彼女は、私を残酷な夫と罵り恨んで、私に終生の呪咀を宣言して別れて去つたのだ。私は、その女の血走つた眼と青ざめた頬とを、まさしく

と夢に見た。その、いやな夢から一度覺めて、再びとくとくと浅い眠りに漂はされはじめた時、私は、もう一つの夢を見た。矢張朝子の夢だつた。今度は、朝子にはこやかに笑つてゐた。而して片手にもう一人の女の手を把つて私の前に立つてゐる——その女は袖を顔に押當て、さめふくと泣いてゐる。

(あなた、この方御存じ?) 朝子は、かう云つて挑むやうに私に笑ひかける。

(知らない。)と私は不機嫌に答へた。

(御存じない筈はございませんわ。)朝子が嘲るやうに笑つた時、私ははじめて、それが弓子である事に気がついた。

(弓子!) 私は思はず斯う叫んで、弓子の方へ兩手をのばしたが、見ると、弓子はいつの間にか、一人の男に寄り添はれてゐる。而して、その男はよく見ると山邊なのだ。私ははつとした。と、同時にその夢から覺めたのであつた。

「何といふ不思議な——いや、馬鹿々々しい夢を見たものだ！ 私は舌を打つて、寢返りをした。」

山邊が歸つて來たと見えて、門口のあたりに物の氣配がした。私は起き出して、山邊と一緒に茶でも飲まうかと思つたが、何だかそれも懶い氣がした。而して、再びとうとうとして眼を覺ました時は、もう、黎明の薄明りが窓硝子にほのめいてゐた。山邊の歸りは随分おそかつたに見える。

二

「ねえ、山邊。」と私が思ひ切つて、それを切り出したのは、愈々明日は歸るといふ日の晚餐の後、山邊の書齋で茶を呑み乍ら二人相對した時であつた。私は、此の機會を外しては、もう語り出す時はないと思つたので、勇を鼓して、こんな風に切り出したのであ

つた。

「僕は君に聞き度い事があるんだがね。」

「何だい？ 馬鹿に改まつて——」と山邊は眼をみはるやうにして云つた。が、私が云はうとする事が何であるかは、山邊にももうわかつてゐるに違ひ無かつた。急に、何ものかを待ち構へるやうに緊張した山邊の表情が、それを語つてゐた。

「僕は、前から聞かうと思つてゐたんだがね。」

「……………」

「弓子さんの事なのだ。弓子さんは君どうしたい？」と、私は單刀直入に云つた。

「あれは君、死んだよ。」山邊は、私の顔をぢつと見つめるやうにしながら、靜かな、といふよりも寧ろ嚴かな調子で斯う云つた。

「死んだ？」私は、驚きに壓倒されながら、喘ぐやうに云つた。

「あゝ、死んだよ。」

「どうして？ 何時？」私は急ぎ込んで聞いた。

「もう五年になる。五年前に、産後がいけなくて死んだ。」

私にとつては、何も彼も意外な事ばかりだった。私の頭はすっかり混乱して了つた。

「産後で？ ぢやあの人結婚したんだね。」

「あゝ、此の町の、ある呉服屋に片附いたんだがね、山邊は、遠くを見るやうな眼附をしながら相變らず静かな調子で斯う云つた。

「山邊。君はどうしてあの人と結婚しなかつたんだい？」

「どうしてつて？」

「君は、あの人を愛してゐた筈ぢやないか？」

「愛してゐたよ、だが服部。君も弓子を愛してゐたらう？」

「僕が——いや」と、私はどぎまぎとしながら云つた。

「隠したつて駄目だよ。僕はちやんと知つてゐる。君がその爲めにどんなに苦んだか、僕は、すつかり知つてゐる。」と、山邊は短い髭を生やした口もとに、淋しい微笑を浮べて云つた。

「然う看破かれて居たんなら仕方が無い、僕もあの人を愛してゐたよ。」

「而して、君は随分苦んだ。僕はそれを見てゐた。而して、君が苦んだと、同じやうに、あの時は、僕も随分苦しんだのだ。」

「君も苦んだ——？」

「どうして苦まずにゐられたらう？ ね、服部。あの時分僕等は、へんにお互ひに探り合つてゐたね。僕等は無二の親友だった。が、同時に、一人の女を中にして暗闘を續けてゐる競争者だった。いや、君の方では、そんな競争者なんてつもりぢや無かつたかも知

れないが、少なくとも僕だけはさうだつた。白状するがね、僕は、ある時、君の部屋に忍び込んで、君の机の抽斗から、君の日記帳を引摺り出したんだ。而して、それを讀んだのだ。』

『僕の日記帳を——』

『さうだ。それを讀んで、僕はどんなに、君が弓子を愛してゐるか、而してどんなにその爲めに苦んでゐるかを知つたのだ。友情か、戀愛か。僕は、二つの間のジレンマに立つてゐる事をその時はつきりと意識したのだ。君は、弓子を僕に譲らうとしてゐる。その決心を、君は涙を以て書いてゐた。それを讀むと、僕は自ら恥ぢたのだ。さういふ君の立派な友情に對しても、僕は、平氣な顔で弓子を自分のものにする事は出来ない——僕は、さう思つたのだ。』

『併し君、あの人は、君を愛してゐたんぢやないか？』

『いや、そんな事は無かつた。弓子は、僕を愛してはゐなかつた。弓子は、積極的に愛の對象を選ぶほど大人になつてはゐなかつたのだ。が、どちらにより多くの好意をもつてゐたかと云へば、それは、僕でなくて君だつたと思ふ。』

『そんな事は無い。』

『いや、さうなのだ。だから、僕がもう少し男性的に振舞ひ得たならば、僕は弓子を、親友服部の幸福な妻として見出す事が出来る筈だつたのだ。』と山邊は、興奮した調子で語り續けた。

『服部。僕は、弓子にも君にも謝罪しなきゃならない。僕は卑怯だつたのだ。僕はたうとう、弓子をあの呑んだくれの、下司な商人の手に投げ與へて了つたのだ。而して、あの女の一生を滅茶苦茶にして了つたのだ。』

『やうか。やういふわけだつたのか？』と私はうめくやうに云つた。『さういふわけで、』

君はあの人と結婚しなかつたのか？」

私の心には、今更のやうに、此の友人の友情に感謝する念と、あの薄命な弓子を愛惜する念とが混合して、或る異様に重苦しい情緒が醸し出された。

「僕が卑怯だつたのだ——」と山邊はもう一度繰返した。私は、山邊の顔に激しい悔恨の表情を見た。山邊は、自分の、卑怯だつた事を後悔してゐる。が、それは、私に弓子を譲り得なかつた卑怯さをであらうか？ それともなまじい友情などに捕はれて、思ひ切つて弓子を自分のものにする事の出事なかつた卑怯さを、悔いてゐるのでは無からうか？ ふとそんな疑ひが私の心を掠めたのであつた。

「いや——。」と私は、何か云ひかけて言葉を忘れたやうに押黙つた。山邊も唇を嚙んだまゝ、重い沈黙のうちに、うなじを伏せてゐた。

その翌日、私は山邊の家を辭した。山邊は停車場まで送ると云つて私と一緒に家を出た。夫人も、門口まで送り出して呉れたが、その人懐こい微笑の裏に、頼り無けな物淋しげな表情が動いてゐるのを、私は、その時はつきりと見た。

山邊も私も、昨夕から、妙に口重になつてゐた二人は、五六町の間、物も云はずに歩いた。

「此邊も大分變つたね。」私は、十年前とすつかり變つたその邊の町並を眺めながら、かう云つた。

「うん。」と云つたとき、山邊は何か考へ込んでゐる様子だつたが、五六歩してからだしぬけに、

「君！ 一と汽車おくれてもいゝだらう？」と云つた。

「そりや構はないよ。」